

514  
197



始



36 1.23

糸本

陸軍中將仙波太郎閣下題辭

大毎社長本山松陰先生題辭

名和靖著

# 昆蟲翁白話

岐阜市 名和昆蟲工藝部出版

514-197

陸軍中將仙波太郎閣下題辭  
大毎社長本山松陰先生題辭

名和靖著



# 昆蟲翁白話

大正  
13. 1. 31  
内交

岐阜市 名和昆蟲工藝部出版

墨氏

六郎



自高



大正...  
...

...

...

勿謂其力微  
群蟻倒大塔  
七年夏  
松蔭



## 凡 例

- 一、本書は著者が發病以來身體の自由を缺き病床中にあるも幸ひ精神に故障なき所より精神的活動を以て國家に報ひんとて昨大正十二年六月思ひ立ち著者が幼少時代より今日に至る間自然界の研究の結果得たる感想を病苦と戦ひつゝ、病床に於て隨筆したるものなり。
- 一、本書は獨り昆蟲のみならず廣く教育宗教特に社會教育上の記事を著者が信する所を忌憚なく直言直筆したるものなり
- 一、本書は發病以來信仰界に入り神佛の御加護に依りて隨筆したるものなれば自然神佛の敬信思想の喚起に努めたり、然し無學文盲なる著者が然も病床中の隨筆なれば幾多の缺陷あるものと信すと雖も若幾分なりとも讀者の参考となり社會を利する處あらば幸甚
- 一、本書出版に當り題字を賜はり助言を與へられたる諸賢に對し深く感謝の意を表す。

大正十三年一月十日

病床にて  
著 者 識

# 昆蟲翁白話目次

第一話	昆蟲翁白話の發端	一頁
第二話	化石白蟻翁と白話	五
第一圖 化石白蟻翁の肖像		
第二圖 在病床の白蟻翁飾版拜受並に同翁夫人		
第三話	大震災の大不幸	七
第四話	蝸牛の行列	九
第五話	蟲の飼育と友人の小言	一〇
第六話	無學	一二
第七話	妻の老母の信仰	一四
第八話	能書と惡筆	一六

第三圖 桂樹翁の筆蹟



第九話 翁の一生は約六丁の旅行……………一八

第一〇話 燈臺基暗し……………一九

第一一話 年齢だけは負けたことなし……………二〇

第一二話 獨特の講習會……………二一

第一三話 實物寫生と幻燈……………二五

第一四話 三段宴會……………二六

第一五話 産兒と蟲名……………三〇

    第四圖 瓢蟲の圖

    第五圖 瓢蟲女史とその寫生圖

第一六話 東京土産話の失敗……………三二

第一七話 父の昆蟲珍書複寫……………三六

    第六圖 父正也翁の首像

    第七圖 父の複寫せし昆蟲珍書

第一八話 黒頭巾の長文書……………三八

第一九話 講話中の服藥……………三八

第二〇話 記念の名句と蘭……………三六

    第八圖 小波先生名句扇子の圖

    第九圖 山縣閣下記念の蘭

第二一話 貧乏が幸福……………四一

第二二話 手械足枷……………四二

第二三話 恩師堀先生……………四三

    第一〇圖 恩師堀先生の御家庭

第二四話 三、三人兄弟……………四四

第二五話 故森文部大臣に献上の額面……………四五

    第一一圖 故森文部大臣に献上の昆蟲額面の圖

第二六話 家族の昆蟲採集……………四七

第二七話 昆蟲標本の爲めの借家……………五一

第二八話 桂樹翁の自然界（小動植物園）……………五二

第二九話 箕作博士の奇問……………五三

          第一二圖 箕作博士の肖像

第三〇話 昆蟲小學校教師……………五三

第三一話 恩人士屋大夢先生……………五六

          第一三圖 土屋大夢先生肖像

第三二話 本邦理想の觀音像……………五七

          第一四圖 本邦理想の觀音様の圖

第三三話 鳳蝶院釋規矩……………五八

第三四話 銅像と土像……………六〇

          第一五圖 昆蟲翁壽像の模型圖

第三五話 衣食住と大和魂の所在……………六三

第三六話 外國文の報告書……………六五

第三七話 實物寫生……………六七

          第一六圖 蚜虫胎生の圖

          第一七圖 ヒゲゾー蟲の寫生圖

第三八話 萬能主義……………六八

第三九話 一等國……………七〇

第四〇話 吾唯足知……………七一

          第一八圖 座右の銘の圖

第四一話 鐵道院囑託……………七二

第四二話 一等乘車券……………七四

第四三話 基礎學なき狂歌……………七五

第四四話 白蟻雜話を白蟻翁雜話と改題……………七

第四五話 恩人本山松陰先生……………七

第四六話 白蟻三昧の動機……………七

第四七話 観音三昧の動機……………七

第四八話 櫻三昧の動機……………八

第四九話 感謝と念佛……………八

第一九圖 林宮司よりの病氣全快の御札

第五〇話 積極と消極……………八

第五一話 無藝無趣味……………九

第五二話 三猿主義……………九

第二〇圖 當世三猿の圖

第五三話 恩師故田中男爵……………九

第二一圖 男爵田中先生肖像と紙製蝶の圖

第五四話 女子のヒステリーと男子の神經衰弱……………九

第五五話 櫻現の観音……………九

第二二圖 櫻現観音の圖

第五六話 感化救済の科外講話……………一〇

第五七話 南瓜の人工媒助……………一〇

第五八話 岡田技師と西澤技手……………一〇

第五九話 宗 教……………一〇

第六〇話 教 育……………一〇

第六一話 蜜柑の煤病に温鈍の茄汁とアラビヤゴム……………一〇

第六二話 不幸と幸福……………一一

第六三話 害虫驅除と左側通行……………一一

第六四話 岐阜の發展策……………一五

第六五話 愚著「薔薇の壹株昆虫世界」……………一六

第六六話 發病の前徴……………一八

第六七話 驅蟲の碑……………二〇

    第二三圖 驅蟲碑文の圖

第六八話 碑 文……………二三

第六九話 白蟻翁新年(大正十年の辭)……………二四

第七〇話 白蟻翁新年(大正十一年の辭)……………二六

    第二四圖 大和白蟻の圖

    第二五圖 家白蟻の圖

第七一話 安産と難産……………三三

第七二話 白蟻防除と富國……………三四

第七三話 害蟲驅除と御札……………三六

    第二六圖 防蟲御札の圖

第七四話 御札で蟲の驅除……………三七

第七五話 害蟲買上法の弊害……………三九

第七六話 局部饑饉と全部饑饉……………四二

第七七話 曲線と垂直線……………四三

第七八話 昆虫翁の六死……………四五

第七九話 邦人の奇性と外人の批評……………四六

第八〇話 稻の害蟲を英人に質問……………四七

第八一話 浮塵子と白蟻の二大問題……………四八

第八二話 害蟲驅除の方針……………五〇

第八三話 百觀音と翁の餘命……………五二

第八四話 白衣觀音假裝行列……………一五三

第二七圖 白衣觀音假裝の圖

第二八圖 觀音行列を終り昆蟲碑の附近に集合の圖

第八五話 願成寺將來の繁昌……………一五六

第八六話 某軍人令夫人との問答……………一六〇

第八七話 櫻の宮……………一六二

第二九圖 櫻の宮全景圖

第八八話 靜座觀音塔……………一六六

第三〇圖 靜座觀音塔十分ノ一模型圖

第三一圖 蝴蝶骨の模型圖

第八九話 自然禁酒……………一七三

第九〇話 盲人の雌蚊捕獲……………一七四

第九一話 不幸の數々……………一七五

第九二話 宮島觀音寄附の假床……………一七六

第三二圖 假床全景の圖

第九三話 人真似嫌ひ……………一八〇

第九四話 蠶は國の忠臣……………一八三

第九五話 收穫皆無の稻刈……………一八六

第九六話 辭世と全快祝ひ……………一八八

第九七話 昆蟲館と六觀音……………一九〇

第三三圖 淺草昆蟲館の圖

第九八話 最後の講習……………一九七

第九九話 續 話……………一九九

# 昆蟲翁白話

名 和 靖 著

## 第一話

### 昆蟲翁白話の發端

大正十一年六月十八日(日曜日)恰も大阪毎日新聞社新築落成の祝として滋賀縣守山町の有志者南喜市郎氏等より同地産の螢三萬疋を大阪毎日新聞社へ寄贈されました、それは豫て本山社長が守山螢保護繁殖の件に付き陰に陽に援助されたる結果大ひに見るべき點の現はれたるを以て報恩の爲寄贈せられたのであります。然る所翁は本山社長より豫て守山螢研究の件につき注意を與へられ屢々守山町へ出張したる緣故もあれば寄贈の際には同行することの必要を認め出張することに決心しました、然るに同社にては同日婦人見學講演會を開催されまして其の際會員に對し曩に南氏より寄贈の螢の一部を分與し

且つ螢に關する講話を徹底的に成し得られたることは翁の最も喜ばしい所でありました。然るに昨夜(十二年六月十七日夜)十二時恰も戸の破るゝか如く烈しく叩くもの有れば或は伊吹山よりの電報(豫て大毎社より依託研究中の珍奇なる伊吹螢一名本山螢研究の爲名和技師並に小林技手の兩名十七日早朝より伊吹山へ出張し居れば何か研究の好結果を得たるに非るかど)の來りたるに非るかと思ひ直ちに荆妻に命じて受取らしたるに電報にはあらで守山町の南氏より速達郵便にて螢一籠を贈呈されたのでありました、其の内に家族等眼を覺して追々集り來りて珍らしく美麗なる螢光を賞讃しつゝ各自に別れました、翁は獨り病床にありて昨年の本日(十八日)のことを想出して翁も昨年の十八日は相當の活動も出來たるに今年の十八日は全く靜止の有様である然るに螢光にも變りなく又十八日は御觀音様の命日で決して變りがないかく揃も揃つて十八日即ち觀音様の命日にかゝる事のありたるはこれ全く觀音様の御引合はせの如く深く感ずるの餘り何にか記念中の記念ともせんとして遂に意を決して翁の拙筆を以て平素信ずる所を記し三十三話

を作りそれを二度繰り返して九十九話となしました。昔しより満つれば缺くる世の習ひ百話よりも一話減じて九十九話即ち白話となりましたのは偶然とは云へ寧ろ不思議と申すべきであります、故に蟲の翁の白人話は清淨潔白なる御觀音様の御指圖に依り勇猛心を出して直言直筆的にありのまゝを記したまでのことであります、昔より聞き覚え居る通り、人の將に死なんとする時其の言ふ事善しと聖人の申されたことでもあります、果して愚著の、世を幾分なりとも益せば翁の喜びこれに如くものなく何時にても地下に瞑することが出来るのであります、願くば第二第三の國民諸君よ實に貴き我が御國を無窮に傳へられんことを祈るのであります、讀者諸君それよく文の至らざる所あるも翁の意ある所を諒せられよ。

命日に蟲翁白話の出來たるは

これも大士の指圖なるらん

螢火の光りに翁てらされて

過去の記念に白話出来るうれしさ

三三話三度重ねて九十九話

一話加へて百とぞなる

世の中は満つれば欠くる事あれば

一話へらして白話とぞする

蟲翁白話は潔白で

直言直筆ありのまゝをば

蟲翁白話の出来たれば

一度は讀みてやつて下さい

大正十二年六月十八日朝六時

病床にて

白蟻翁

名 和

靖誌

六十七歳

## 第二話 化石白蟻翁と白話

第一圖



化石白蟻翁の肖像

集)中に加へたる口繪を茲に出して當時の翁を現しました、圖の如く珠數の中に現したのは現世の人であつて現世の人でないことを意味したのでありまして、以來は兎も角化

安政四己年に生れたる翁も大

正六年に至りて六十一歳即ち還

曆となりて過ぎゆく年月の如何

に早きかに始めて驚きました、

而し今更驚きましても最早致し

方はありませぬ、そこで還曆記

念として特に六事業を致しまし

た、其内印刷物(還曆記念論文





在病床 白鷺翁 藍綬 獲章 飾版 拜受 並同 翁夫人

大正十一年八月下旬發病、爾後病床にありて大正十二年一月二十日撮影

石の心持ちにて出来得る限りの活動をして居りましたが、不幸昨年八月下旬發病後は全く起つことの出来ない身となりまして狭き病床に滿一ヶ年以上伏して居ります。

右の次第にて全く致命傷を受たる事なれば何等仕事の出来様もなければ共幸ひ餘命のあることなれば此の世の置き土産として思ひ浮びたることを特に九十九話を集め白話となづけてものすることと致しました。致命傷を受けたる翁が自由ならざる筆を取ることであるから間違等は無論多くあることと思ふ讀者諸君請ふ諒せられよ。

### 第三話 大震災の大不幸

明治二十四年十月二十八日朝六時頃の濃尾大震災は翁の假寓を始め實家も全く倒壊全滅となりました。其假寓には澤山の昆蟲標本もありて過半は破損しまして今も尙其の破損を回復し得られぬことは不幸中の不幸であります、翁は大小種々なる不幸に遭遇しましたが大震災の損害は全く未曾有であります、詳細の記事を記せば一大冊子となること

なれば極めて簡単に記して筆を止むることに致しました。

安政四巳年に生れたる翁の生前に於て江戸の大地震は有名なるものにて其當時の死者は十萬人なりとの事であります、尙小供心に聞き覺へ居ります其當時の落首は  
安政の御代にこうした大地震

こんな事なら嘉永でもよし

濃尾大地震に遭遇してあらゆる困難を見聞して居る翁に取りては今回東都の天災を聞くも同時に身は病床にあるも心は直に災害地に飛び行きて何事も心眼を以てありく〜と眼前に其慘狀が見へて居ります。

右の次第で罹災者に對して出來得る限りの救助をするは當然なるも何分不具なる翁には萬事意の如くならすせめて幾分なりともと思ひ囊中を振ひて出金し一方荆妻に命じて赤十字社又は愛國婦人會員の資格を以て出來得る限り活動せしめて居る次第で震災の体験を得たる翁には一層深く感ずるのであります。(十二年九月六日朝記)

#### 第四話 蝸牛の行列

父の常に翁に對して御前は幼少の時代より蟲好きであつたと、昆蟲研究を始めて後屢々聞かされて能く知りました、其話は蝸牛の行列を殊更好みましたと、何か機嫌の悪い時には必ず生垣に用ひてある横竹の上に澤山の蝸牛を並べてツン〜角出せソロ〜歩めとて老母が面白く云へば脊負れたまゝ二本の角を出して徐行する有様を眺めて喜びました、今も尙其面影を深く感じて居ります其の際蝸牛の何物たるやは全く知らざるも兎も角活動する所に甚大の興味を持ちたるものならんと思はれます。

幼少の頃より蟲を好めるは

父の話でしるぞうれしき

小蟲の何物なるかは知らざるも

動くところに興味ありけり

小供より覚え込みたることなれば

忘るゝことは出来得ざるなり

自然をば愛する心あるなれば

誠に善きと深く信ずる

小供より自然の興味教ゆれば

後の幸福受合である

## 第五話 蟲の飼育と友人の小言

在校時代頻りに寄宿舎室内に於て種々なる蟲類飼育の結果、夜間ケムシの這ひ出して友人の枕頭へ御見舞せしとて大ひに閉口して翌日舎監へ申出で翁を他室へ替るか自分を替るか兎も角翁との同室は出来ぬとて請求して止まざれば種々説諭を興へて漸く平穩となれりと後年故人某舎監の話の聞きて驚きました不思議にも小言を云へる友人はまだ現

存者なれば時を得て昔話をも思ひ居るも不幸其後面會の期を失ひて居ります。

室内で飼育の蟲が這ひ出して

友人までも迷惑をする

寢室へ蚤、蚊、蠅などあたりまへ

不意に毛蟲が來てはたまらぬ

蟲の爲室替へなどと小言受け

定めて舎監困りはてらん

幸に舎監程能く説諭され

事なく済むはうれしかりけり

蟲飼ふて思はぬどこへ飛火させ

迷惑かけし罪は深けり

## 第六話 無學

一一

翁の無學は有名のものにて自分ながら不可思議にも無學の事は徹底的に了解して居ります、人より學者等の言葉を聞くと汗顔の至りと云ふよりも寧ろ輕蔑さるゝ様な心持ちになります。何故斯くも無學となりたるやと深く考ふれば祖父桂樹翁より常に自然界の事を聞きたる爲め遂に自然界に接近して自然を愛することが發達しました結果人爲的の書物が如何にも興味なく中々記憶することも出来得ざれば讀まぬ勝ちとなりました一通は四書五經等其の他少々讀みましたが何分興味なき爲怠り勝ちであります。漢書己に斯くの如し洋學一層好まぬ爲學課時間に切迫せば頭痛を始めます結果全く御話しになりませぬ然し其實少々は讀みましたが昆蟲の事は國の事情を異にする爲め幾分の参考となりしも病氣となりて迄も研究は出来ないのであります、餘り自然を愛するも一利一害で大ひに注意を要するものである。

自然なる書物の一部讀みたれば

人爲の書物讀み得ざるなり

人爲的書物の讀めぬ其の爲めに

無學のものとなりけるかな

幸ひに無文の書物讀みたるに

大馬鹿ものとなりけるかな

大馬鹿がこゝまで來る其譯は

神と佛の御恵みである

無學でも御國の爲めに盡さんと

忘るゝ事は出来得ざるなり

學者をば學士博士と稱ふれば

無學の翁馬鹿士なるらん

然るに荆妻の無學は翁よりも一層甚しく教育の程度は漸く尋常科位の卒業で誠に御恥しきものにて兎も角眞面目の田舎ものなれば幸ひ悪化され居らぬのが仕合せであります。實に似たもの夫婦とは昔より能く言ふたものであります。

翁無學妻は一層無學なり

無學同士の夫婦なりけり

同格のものゝ夫婦は安氣なり

馬は馬づれ牛は牛づれ

## 第七話 妻の老母の信仰

無學なる妻の老母は佛教信者なることは有名でありました暇さへあれば寺院に參詣するを大いなる仕事と心得て居られました。其結果蚤一疋も容易に殺すことをなさず、寧ろ蚤の出で來りて刺す時は身体の痒みを心捧して折角血を吸ひに來たものなれば少しは

與へてやるまで暫く心棒の後藪の中に入り糞を解きて拂ひ落さるゝ由と妻よりの話を屢々聞きました。又近隣の小供等集りて蟲類を玩弄し居れば幾分の代價を拂ひて其の蟲を買ひ取り放ちやれば又小供等は其蟲を再三捕へ來るを以て結局其蟲を持ち歸りて紙に包みて貯へ置き十、二十となれば菓子箱に納めて娘の婿なる翁の土産として送り越さるゝ事は屢々であります。信者の老母に對して殺生さるゝと云へば決して殺生にてはなし小供の爲めに弄り殺しに遇ふものを買ひ取りて御前の手許に送り置けば良き蟲は標本ともなりて國家に用ゐなせば蟲の成佛することは受合で決して無益の殺生ではありませぬとの返答には大ひに驚きました。翁も夫より深き感化を受けて蟲供養の必要あることを認めました。現に蟲供養を行ひたる事は屢々にて是は全く妻の老母の賜物で決して忘れては居りませぬ。結局翁の如き幾百千萬億と云ふ昆蟲を殺したるものが自然信仰心を起したるは是れが爲めであります。

妻の母信仰心の深き爲め

何時の間にやら感化されたり

蚤が来て血を吸ふまでは心棒し

吸へば始めて放ちやらるゝ

蚤放つ心の内を味へば

信仰心の溢れ居るなり

蟲死して御國の爲になるなれば

成佛するは間違はなし

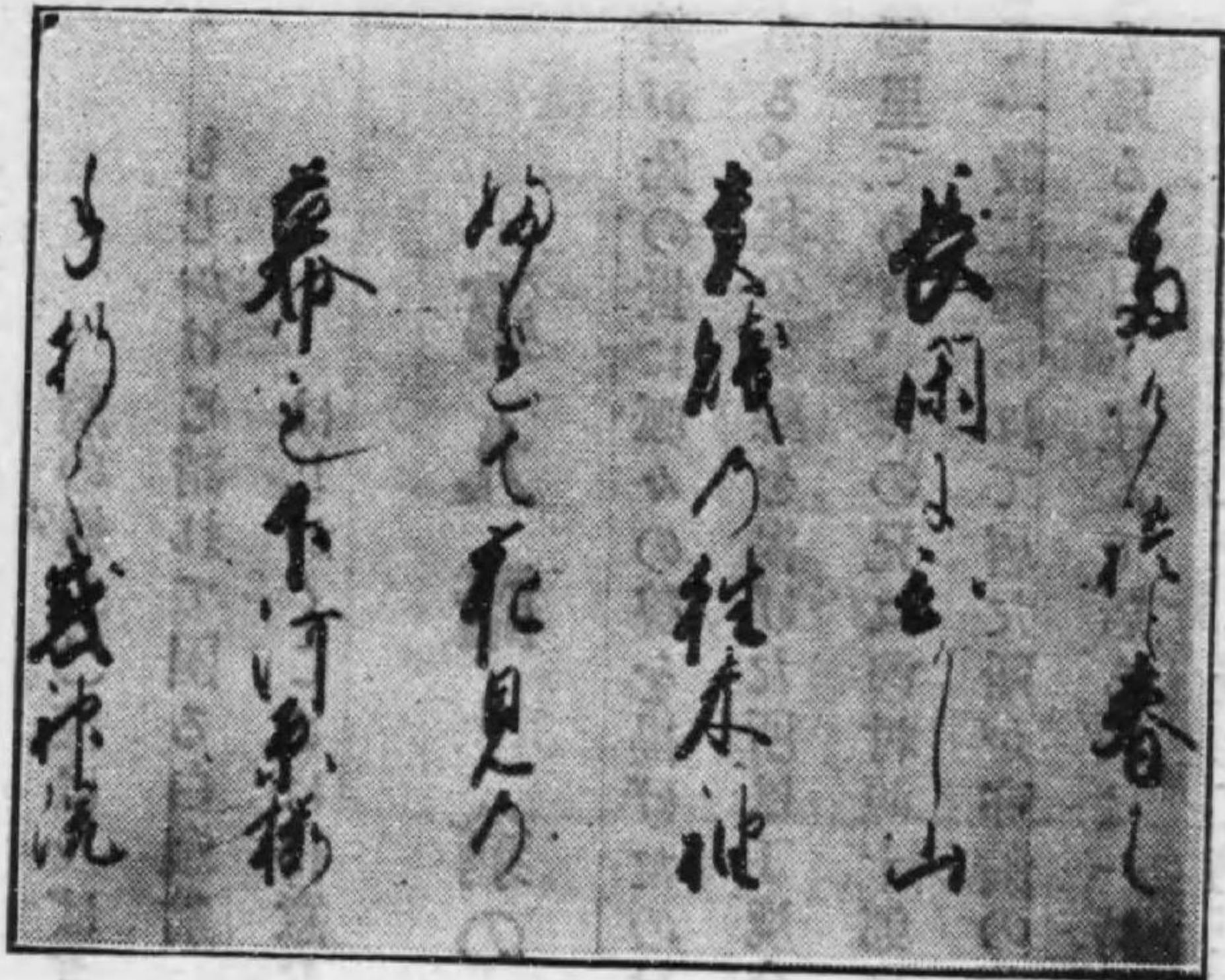
むしの爲め供養するのは善きことで

慈悲の心の深きなるらん

### 第八話 能書と悪筆

翁の祖父桂樹翁は昔し青年時代には京都の某公家を師として大江流を學びたる結果維

第三圖



桂樹翁の筆蹟

新の前後に於ては田舎の郷里に手習ひ師匠となりて寺小屋を開き多くの子弟を養成致しました、翁は其の内に入りて頻りに習ひたるも悪筆の爲め奨励せられしも自然界を樂しみて習字には不熱心なれば何時も小言を受けたるは今も忘るゝ事は出来ませぬ、其の當時興へられたる手本の一冊が古本中より現はれたるを以て特に記念として其の一切を出して其の筆蹟を残して置きます、同時に翁の悪筆を比較して置く筈なるも如何にしても其勇氣は出でませぬ、悪筆の爲め一生涯苦心をしました。

祖父の筆飛蝶の如く自由なり

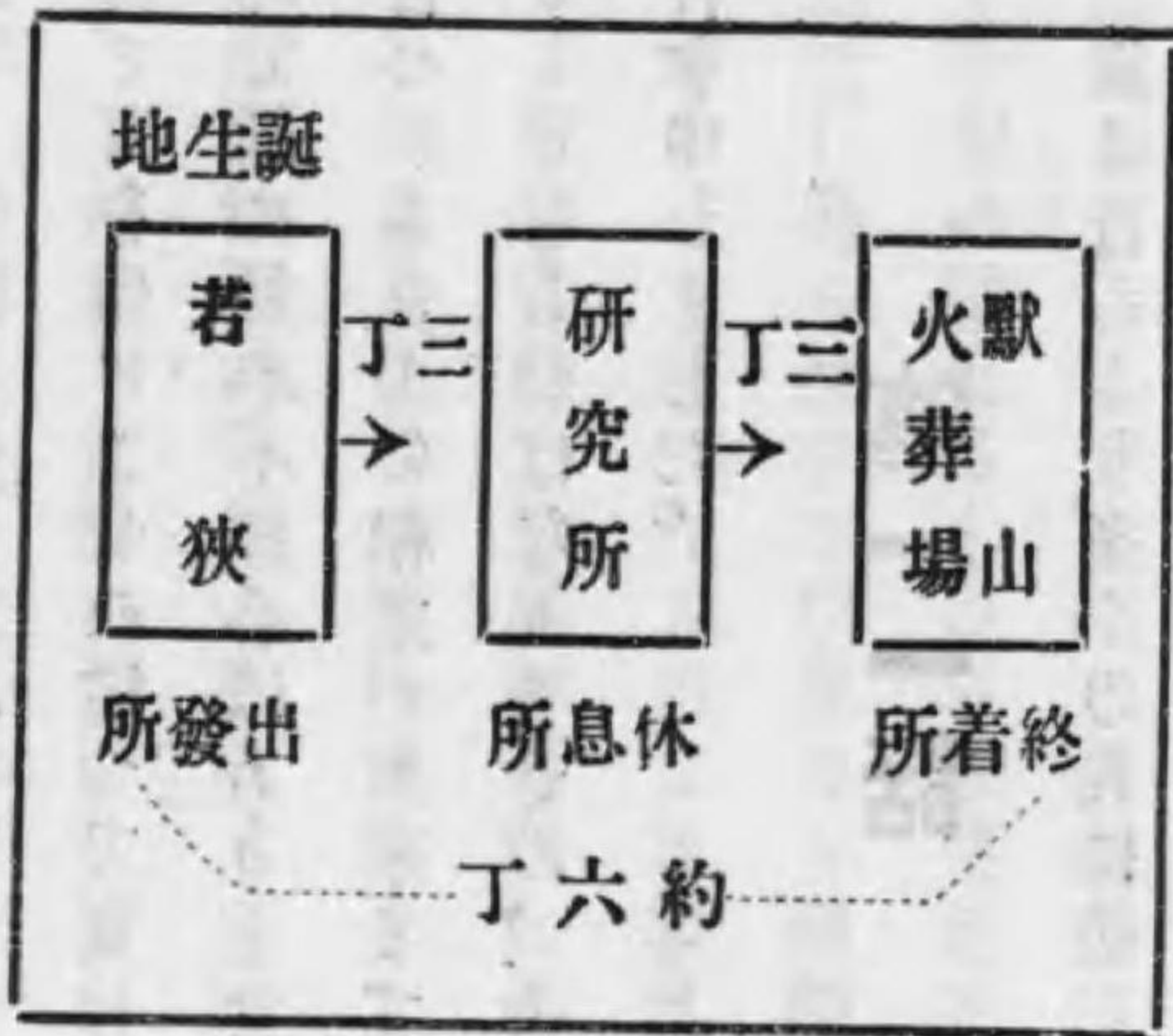
翁の蛾(我)流は及ばざりけり

もじかけと請れて困る白蟻翁

はじかくことは得意なりけり

### 第九話 翁の一生は約六丁の旅行

翁が此の世に呱呱の聲を揚げたのは今を去ること約六十七年前即ち安政四年十月八日である。其の初聲を揚げた所は丁度今住んで居る所から西北約三丁許の東材木町で母親の郷里である、母の兄は河村源十郎と稱し酒屋を業として居た、當時の屋號は「若狹」として一般に知られて居た所が亦翁の住んで居る所から南東約三丁に黙山火葬場がある、して見ると目下住んで居る所は一時の休息所(研究所)である、此の休息所中に於て一朝命令があれば何時にでも發して約三丁の所即ち黙山火葬場へ行く丈の事である、斯く約六



翁の一生の約六丁旅行の圖

丁間の旅行中に行つて來た事柄に就いては各自の御批評は御勝手次第に願つて置きます。

若狹より黙山に行く休息所

毀譽褒貶の人に任せて

三丁來て休息中の白蟻翁

命令あれば亦も三丁

### 第一〇話 燈臺基暗し

今より二、三十年前のことなりき某氏の翁に對して申されしことの中に君は他縣に親切にして自縣に不親切であると如何にも不足相に申さる、其理由を聞けば其證として他

縣に於ては害蟲防除も能く行はれて居るも自縣内は却て反對の結果を見るのであると翁は大ひに驚き直に返答を致しました、無學不徳の翁でも他縣へ行き昆蟲の話をなせば極めて熱心に聞かるとを以て自然實地に應用され結果もよくなる譯であります、自縣では途手も他縣の如く熱心に聞く人はありませぬ、又名和の話か例の蟲の話かと云ふ様で殆んど耳を傾けませぬ従つて實行も致しませぬので成績は中々舉りませぬので翁は縣の内外で話に熱心不熱心はありませぬ、聞く方に於て天地雲泥の差があります従つて成績も自づから良否の相違が出来ます。昔より申す燈臺基暗しであります、今の世は電燈基明るしとならねばなりません、夫れが中々にそうはなりませんから困つて居りますと御返答を申しました。

(十二年八月二十三日記す)

## 第一一話 年齢だけは負けたことなし

翁は昔しより多くの人に接したるに知己友人等の出世したるもの多く今は天地雲泥の

差を生じました又翁は師範中學校等に約十年許奉職の結果卒業生並に近年は昆蟲に関する講習の結果多くの卒業生を生じ何時の間にやら俸給は翁の數倍となり位置等は途手も接近し得られざる程なるも年齢に至りては當時の差と同じことでもあります。誰一人翁の年齢を飛び越へたものなき事は誠に不可思議であります、此頃も一名の所員を招かんとして以前當所で昆蟲を研究したるもの却て便利と思ひ二、三人に紹介したるが翁の給料の二倍以上となり居れば途手も及ばぬこととて招聘を見合はせました、是等の人は學力經驗は無論翁に勝り居るも年齢だけは以前と同様でありました。

俸給や地位は慥に負けたるも

年齢ばかりは負けたとなし

## 第一二話 獨特の講習會

當所主催の昆蟲に関する講習會は普通の講習會とは異りて決して受賣販賣取次販賣に



非ずして全く製造販賣なれば中々困難であります。又マラリヤ的講習共申します午前は専ら人為的教場にて講話をなし午後は専ら自然的即ち天然教場に於て専ら實地研究をなすので誠に面白きことなるも普通の講習に慣れたる方には餘程苦痛の様に考へられました講習中は誠めて蟲に非ざれば言はず蟲にあらざれば聞かず蟲にあらざれば見ずとのことは各自に確守することを約し置きますのであります兎も角二週間を經過せば結了し得るなれば誠に愉快の講習にて熱心なる方は講習期間内に或は數百種を集め名稱を附して有形の土産として、尙無形の土産も澤山に出來て販られるのが常であります。

講習もやつと三十六となる

百も二百も重ねさせたし

講習の開ける度に人がふへ

人のふへれば蟲はへるなり

蟲へれば自づと國の富はふへ

富の増すこそありがたかる

講習は普通のものど異れば

覺悟のほどは必要である

昆蟲はいつも話の種となり

宇宙の眞理面白く解く

教科書はバラの一株昆蟲世界

實地研究終了り得らるゝ

講習の目的如何と問はるれば

役に立つ人増すと答へん

取次ぎや受賣販賣つきるとも

人々の製造販賣つきることなし

講習はマラリヤ的であるなれば

二週の後には壯快となる

人為的教場の價值は少くて

自然の教場尊ぶとかるべし

午前人為午後は自然の教場で

教へ受ければ智識湧き出づ

講習を受ければ屹度智情意の

奥の奥まで了り得らるゝ

講習は智識を興ふものならで

信仰心を富す目的

慈悲深き神と佛の御援助で

開く講習價值は多々あり

獨特の講習なれば昔しより

變らぬことにねうちあるなり

天然の教場にては得られしか

講師驚く事も多かる

人為的教場にては方針と

天然教場練習をする

### 第一三話 實物寫生と幻燈

講習會の節は必ず最初實物寫生をなさしめ夫れを簡單種子板に作ることを教へ終りに幻燈使用の上説明をなさしめたるに非常の好成績を得て喜びました。

實物の寫生を基に幻燈で

説明すれば徹底をする

寫生せば細かきことに注意して

自然の微妙探り得らるゝ  
寫生より種板までも作り得て

幻燈使用説明をする

天巧を奪ひし程の智識にて

徹底的に説明をする

巧妙の説明聞けば自づから

害虫防除成功をする

受け賣りの品で説明するよりも

自己の製品尊とかるらん

## 第一四話 三段宴會

三段宴會は全く翁の獨創かと思ひまして常に行ひて大ひに得る所もあれば茲に詳細に

記して見ましよう、三段宴會とは三段に別ちて宴會をするのであります、最初は慰勞宴會にて次は懇親宴會終りに送別宴會をするのであります、抑其起りは翁の各地に出張の際講習會は勿論一場の講演をしても流行物として直ちに慰勞宴會を開かるるも殆んど勞を慰せらるゝ様なる宴會はなく却而迷惑をするので翁はこれを苦勞會と稱して居ります儘に一大弊害であることを實驗しました。何故慰勞會が苦勞會となるやは主催者は講師本位なるに却而自己本位の宴會となつて自然主賓の迷惑をも顧みず自己に愉快せば足りとの趣意なればなり大ひに注意すべきことであります。故に翁は常に是等の弊害を強制せんとて明治三十年浮塵子大發生の結果翌三十二年よりは當所主催の全國より生徒を募集して全國害虫驅除講習會の名稱の許に講習會を始めたるに儘に全國より有志者の續々入會せらるゝを以て年に四回位宛開會する様になりました。其修了の際には修了生諸氏より講師に對して慰勞宴會を開きて招かるゝも翁はいつも招きに應ずることは大困却にて慰勞宴會は到底理想的には出來得ざるを以て懇親會を主として翁も會費を出して出

席することゝを約束して種々なる條件を附するのであります第一慰勞會の主意を完全にす  
る爲め僅か五分間だけ正式に席に着し代表者より講師と修了生の献酬の盃を交換し五分  
間を終れば直ちに懇親宴會に移り諸氏十八番の藝當を出し充分に面白く愉快を盡すので  
あります歌は悉く昆蟲に關するものである、尤も席順番號は害蟲益蟲の名稱を以て定め  
當日の閉會まで必ず其本人の姓名を云はず螟蟲君蚤君蝨君瓢蟲君と呼ぶこと其席の酌婦  
には枝尺取、裊赤横這等の名稱を與ふること宴會そのものは悉く蟲盡しにて愉快を主と  
して講師に對して勞を慰せられました、然る上は諸君と翁とは切ても初れの關係あれば  
比較的澤山の時間は懇親會に費し最早大勢の定まるを見て送別宴會に移り適宜靜かに解  
散せば必ず苦勞會に終らず慰勞の趣意にも叶ひ特に懇親會の貴きことを知り最後送別會  
に終了せば翁の尤も喜ぶ所である約束して行ひたるに何回致しても一度も不都合なる出  
來事もなく何れも愉快を盡して終了さるゝは全く三段宴會の効能であることを慥に實驗  
したのであります普通の宴會は禮に始まりて禮に終ると云ふ不体裁であるが三段宴會は

まだ一度も誤りたることなきは實に愉快でありました。害蟲ウンカ蟲の籤でも引きたる  
時は随分迷惑するも是に反して益蟲カマキリなどに當るものは其得意實に盛んなもので  
あります是れ徹頭徹尾昆蟲特に害蟲益蟲のことを愉快の内に知らしむるのが目的であり  
ます尙種々なる俗歌に昆蟲入りの新作も出來得意の美聲を發せる青年もあります茲に至  
れば往々老人も若返りて青年と共に大氣焰を吐く等何にかに取りて面白き一夜を送るの  
であります何分全國より集まる人々なれば各地には獨特の歌等もありて實に愉快又愉快  
にて眞の慰勞會かと思ふのであります。

#### 初慰勞次は懇親後送別

#### 三段宴會愉快なりけり

#### 慰勞會名義よけれど其實は

#### 苦勞の程も恐れ入るなり

#### 宴會の席は害益蟲名で

本名言はず蟲の名を呼ぶ

蟲驅りて國に盡さん人々は

うたう歌まで蟲盡しなり

二週間練りに練りたる智識にて

巧妙的に何事も出来

### 第一五話 産兒と蟲名

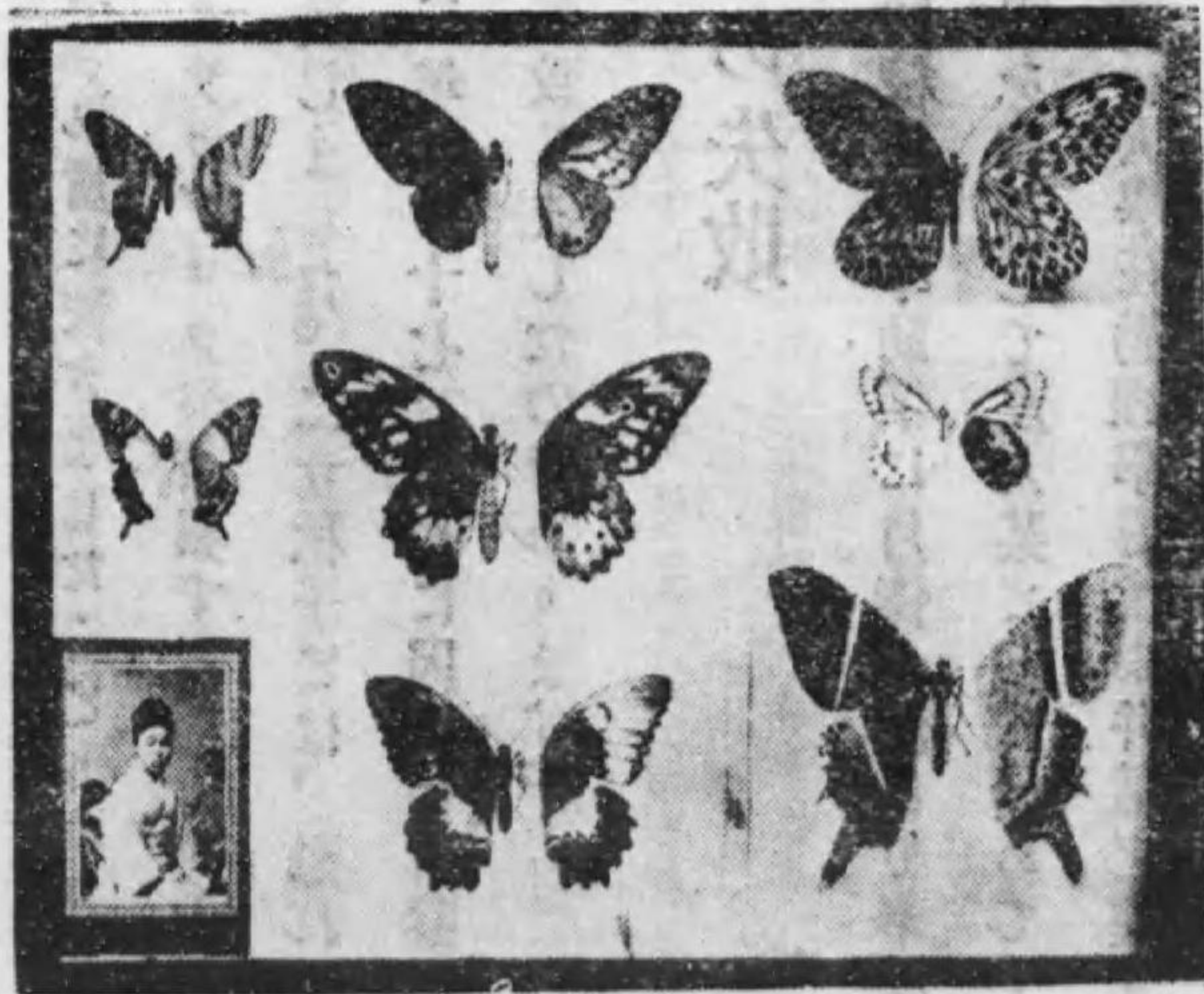
翁は明治十七年一月十九日(土曜日)午前中に於て有益蟲たる瓢蟲を寫生し居たるに寫し終りて寓居に歸りたれば恰も荆妻の郷里より女子を安産したりとの報を得ました、そこで七夜の命名式に送る爲め其女兒の名を貴(たか)と附しました、其理由はテントウムシを英語にてレデーバードと云ひ即ち貴女鳥と譯します其の貴の字を取りて「たか」と附しました、又其の後頻りに昆蟲の寫生圖を作らせましたが雅名を瓢蟲女史と申しました

第 四 圖



明治十七年一月十九日寫生瓢蟲圖

第 五 圖



瓢蟲女史の寫生圖

も其邊より來たのであります。因に時の知事小崎利準殿より或時不意に「お前は蟲がすきだとして小供にまで蟲の名を附けたのだな」と申され實に驚きましたこともありました。又孫の長女華子は明治四十年二月十五日恰もクサカゲロウが産卵する如く夜中靜かに安産したれば夫れ故優曇華の華に因みて華子と致しました。二女秋子とは、恐れ多くも皇太子殿下の當所へ御臺臨遊されたる明治四十二年九月十七日秋期に因み尙有益蟲たる蜻蛉のことをアキツムシと稱するより秋子と命名致しましたのであります。

## 第一六話 東京土産話の失敗

明治十五年四月八日岐阜縣農學校を卒業直に同校博物學助手に月俸十圓にて奉職しました。其後は頻りに昆蟲研究中翌十六年夏期休暇を利用して友人某と共に始めて上京しました。其際の校長堀誠太郎先生（現在東大理科大學在勤理學博士中井猛之進先生の嚴父）の添書二通を貰ひ受け、東京神田一橋にある大學理學部に出頭して一通は理學部

教授箕作佳吉先生、一通は大學の監事服部一三先生に出して始めて面會を得ました、其際今の理學博士石川千代松先生を始め其他大學の諸先生には大概面會するの光榮を得ました。夫より箕作、服部兩先生より各所に奉職等の方々へ御紹介の勞を得て多分三十餘

名に面會を得たので大いに喜びました。

何分始めての上京然かも理科大學を始め其他各所に於て珍らしき標本等を見且つ有益なる高説を聞き得たるを以て田舎もの耳目には全く驚く程にて澤山の新智識を得て随分得意となりて歸縣しました

第六圖



父正也翁の肖像

然るに親族友人等は始めての東京歸りのことなれば直に新富座の芝居は如何との質問を受けたるも其の實見ないのみならず新富座の何れにあることをも知らざれば大ひに笑はれました。次に向島の景色はこの質問も落第にて其實隅田川を越へませなんだ「他人に

は東京行の價値は全くないので馬鹿にされましたが今更致し方のない譯であります。然し翁には只々諸先生に面會の光榮を得て少しにても將來昆蟲研究上直接關係に參考となることのみを以て満足したので世間の人並の東京見物などは最初より翁の眼中になければ全く歸縣後馬鹿にされたる失敗は實に此邊にあつたのであります。

人並の東京行は平凡で

名所遊びは眼中になし

添へ書の二通がふへて三十三

観音様の妙智力なり

三三は観音様の御手引で

今日あるは如何にうれしき

東京の土産話に笑はるゝ

はじの恥でも致し方なし

百里行く始めは矢張一步なり

一步違へば恐ろしきかな

青年の東京行きは何んの爲め

墮落修業の手始めである

墮落する青年どもの多ければ

國家の基礎は危険千萬

心得の悪しき青年東京行き

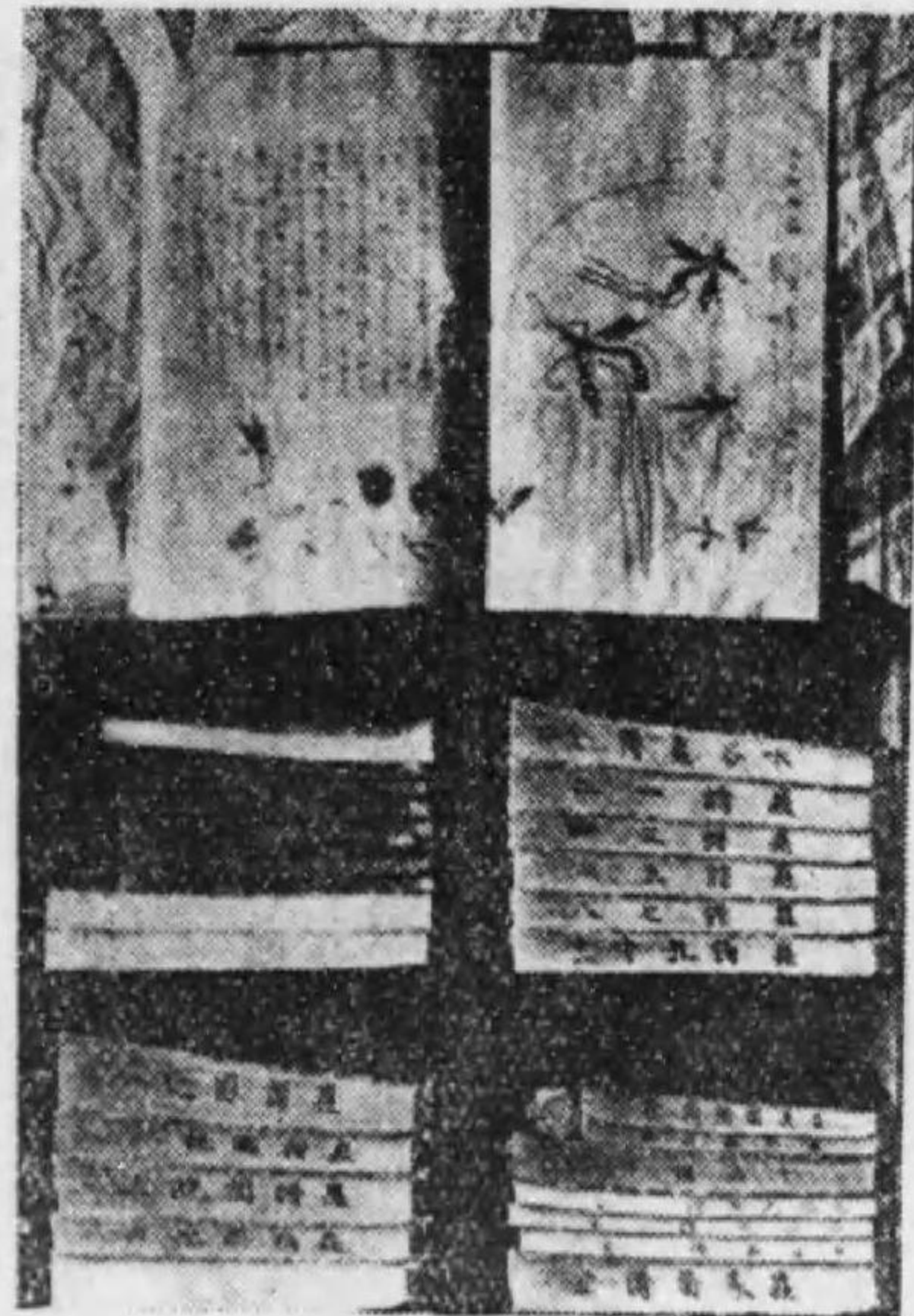
なるべく出さぬ事が肝腎

今人の東京土産聞く時は

帝劇三越漏るゝことなし

第一七話 父の昆蟲珍書複寫

第七圖



父の複寫昆蟲珍書

翁の父正也は老年（七十歳にて死去）に到り昆蟲の採集を始め伊吹山の如きは平氣にて採集に参りました。又寫生を能くして採集の間は故男爵田中芳男先生より澤山の診奇なる昆蟲寫生圖を拜借しまして悉く複寫したのであります。今茲に示す箱内にある數十冊に其の遺物であります。實に當所の記念中の記念昆蟲診書であります。（八月二十四日記す）

第一八話 黒頭巾先生の長文書

大正十一年何月頃か月日は記憶せざるも長さ三間半に亘る極めて懇篤なる書面を有名なる黒頭巾横山健堂氏より参りたるを以て遂に萬障を繰り合せの上山口縣瀧部の夏期大學へ参ることに決心致しました。約の如く大分縣の要件を終り直ちに出發して瀧部へ参りました際には病氣は随分進行して居りました、平素の如き勇氣は全くなく受持時間の講話の出来るや否は不明にて非常に心配を致しました、然るに折角参りたる以上は假令演壇に立ち講話中に死するともど覺悟を決心の上漸く結了の出来たることは寧ろ神佛の御加護であると深く感じたのであります何分有名なる諸先生の間に無學の翁の加はりたるは寧ろ滑稽と申すものであります、一滴の降雨なき大暑の内に午前は昆蟲の話を感じ午後専ら實地研究を致しました夫より會員は慥數百名の多きことにて中々苦痛を感じたのであります。黒頭巾先生の御話しには今名和死なば慥に僕は殺人罪を犯したると同様とまで申されました。

三間の手紙に感じ参りたり



病氣の爲に講話不出來で

演壇で戦死の覺悟ありたるも

講話不出來で徹底をせず

### 第一九話 講話中の服薬

大正十一年八月下旬山口縣瀧部に於ける夏期大學講演中翁は發病前非常に氣分悪しき内にて死を決して講話をなしたれば聽講生の内には多數の醫師あれば各自に翁の病氣を心配せられ得意の薬を持參して翁に勧めらるゝも數名の方より一時に頂戴せしこととて何れの薬を服して宜しきものなるや翁も一時は大々的迷惑をしたのでありました。

### 第二〇話 記念の名句と蘭

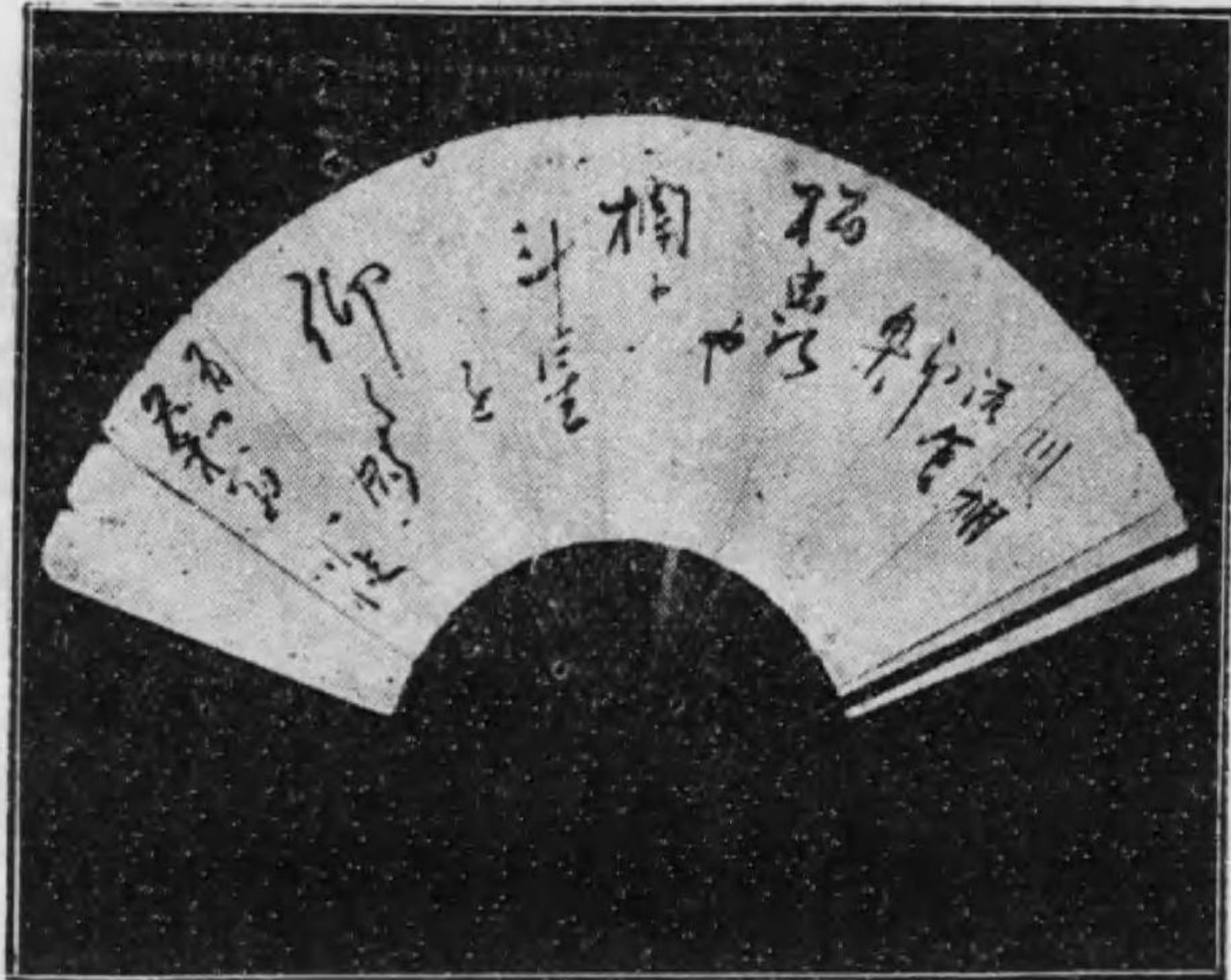
大正十一年八月山口縣瀧部にて夏季大學開會の際中山太一君の案内にて有名なる川棚

温泉に講師一同招かれ入浴の後小波先生外一同と共に浴舎の欄干にもたれ松虫の美聲を聞き北斗七星を眺め居るとき小波先生には一句出來たるとして直ちに執筆されましたのが上圖の扇面でございます。

松虫や欄に斗星を仰ぐとき 小波

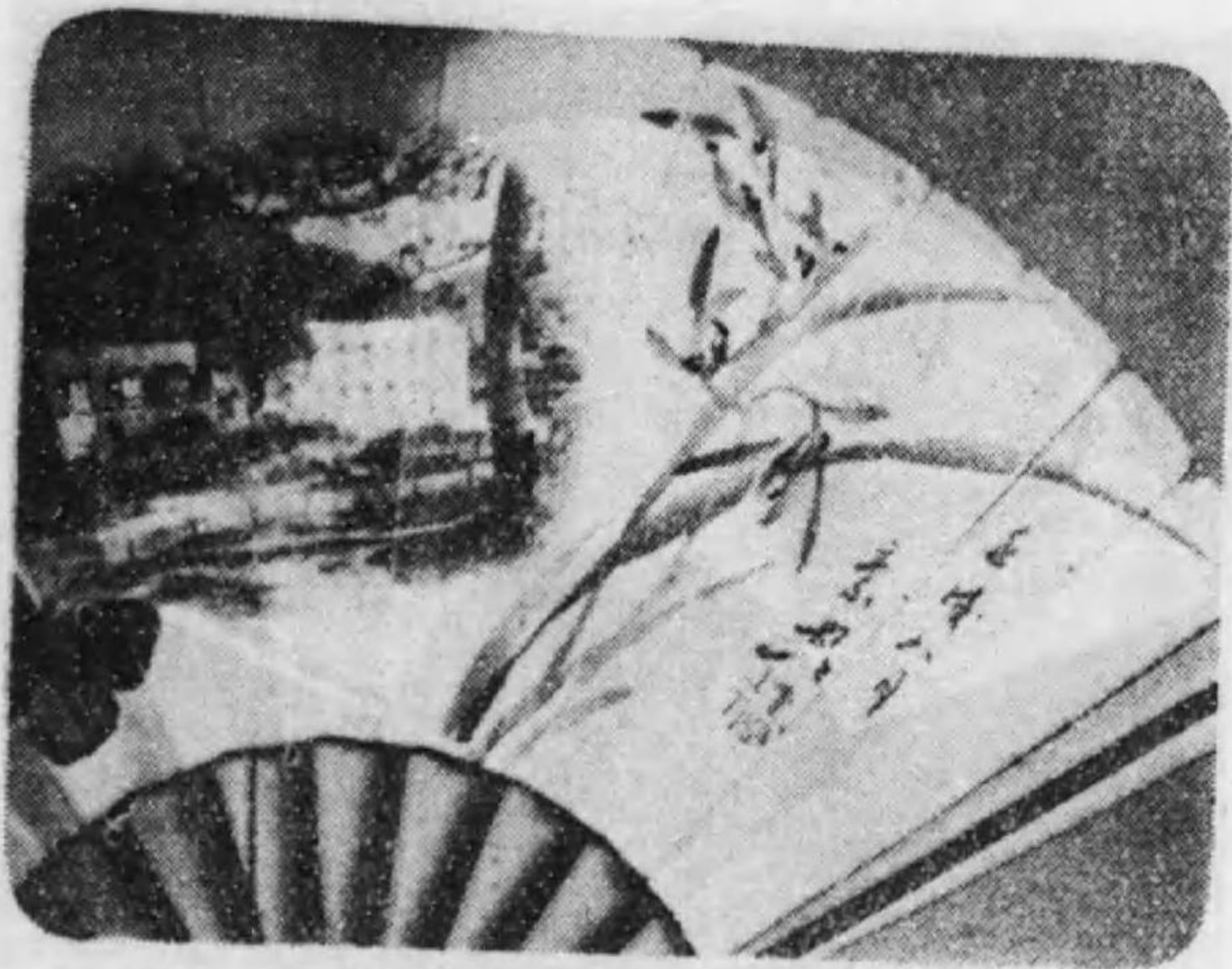
尙同講習中八月二十六日中山氏宅にて圖らずも中山氏の紹介にて山縣(伊三郎)閣下に面會致しました其の際の滑稽は「始めて」と翁か申せば閣下には決して始めてではなく己に岐阜にて面會した、自分は愛知縣に在職中岐阜縣の小崎知事の案内にて澤山の

第八圖



小波先生の名句の子圖

第九圖



山縣閣下記念の關

昆蟲標本を見せて貰ひ其の時君の説明をも聞いたとまで申されましたのは驚きました、其の際何歳とお尋ねになりましたので安政四年巳の年生れで本年六十六歳と申せばそれでは同年であるが何月生れとお尋ねれば翁は十月八日生れと申せば俺は十二月二十三日（或は二十六日なりしやも知れず翁確たる記憶なし）であるから少し弟分であると思はれ極めて磊落にお話しかありました、夫れより父存命の際には名和が来て小田原の古稀庵の白蟻退治をして呉れたる由まで深く記憶して種々御話しのありたるには寧ろ驚きました、然る

に一方閣下が多数の人の請を入れて頻りに蘭を畫かれ居るを見て翁も何か記念と思ひたるも所持の扇子の裏面には曩に書いていたゞきたる小波先生の名句あるを以て止むを得ず表面の僅かの餘白に特に御願致した次第であります、夫より下關まで自動車でお供を致しました。

## 第二一話 貧乏が幸福

翁の家は極めて貧乏なれば富家の友人とは同一の行ひの出来ぬ所より遂に自然界を愛する様になりましたのは寧ろ幸福でありまして若し富家の友人と同一の行ひを致しましたなれば恐らく今日の翁になれぬことを確信して居ります是を見ても貧乏であつたのを喜びて居るのであります。

## 第二二話 手械足枷

翁の發病後殆んど滿一ヶ年となりました、然るに日々見舞の客は中々絶へませぬ其の内には親切の結果翁の歩行の出来ぬのを悲しみ頻りに歩行を勵まざるゝも最早決心し居れば歩行の出来ぬも覺悟のことなれば折角の親切も無効となりまして誠に申譯けありませぬ。目下の如き翁の手足の不自由なることは御觀音様より修養せしめらるゝ所の御慈悲なることを自覺して居ります。

翁の爲手械足枷賜ふのは

觀音様の御慈悲なるらん

折角に手足のかせを給ひしに

すぐに御返し出来ぬものなり

修養の出来たる後は兎も角も

今のところは大切に

必要のなくなる時は自づから

手械足枷となるものなり

(十二年八月二十三日記す)

### 第二三話 恩師堀先生

第十圖



恩師堀先生の御家庭

目下歐米留學中の植物學の大家理學博士中井猛之進先生の嚴父堀誠太郎先生の岐阜縣農學校に校長の職を奉せられし際同先生の多大なる御同情に依りて全く今日あるを得たのであります、偶然にも其の當時の寫眞を保存し居りたるを以て茲に掲げて恩師に對して萬分の一の謝恩とする次第であります。右より御令嬢しげ子様、次は御令閨様次は御令嬢あや子様次は恩師堀先生次は御令息猛之進様であります。

## 第二四話 三、三兄弟

四四

第一の三兄弟は三河の岡田虎二次郎ち静座先生にして不幸四十九歳を一期として逝去されました、次兄は甲府の内藤文治郎君にして今は在東京に於て大活動中にて近き將來に於ける大成功者と翁は喜びて其の期の到るを俟ちて居ります年齡は翁が最高なるも何事も不完全なれば兎も角弟分であります、是れ迄岡田、内藤の兩君には翁を弟分として陰に陽に多大の同情を寄せられましたのであります。

第二の三兄弟は岐阜縣内にあります長兄は林茂君で次兄は桑原貫之助君であります長兄は目下自村の村長を勤め近き將來は模範村となることは明瞭であります、次兄桑原君は長年の間專賣局に奉職錦を着て故郷に飯られ静養の身となりました、翁の年齡は不思議にも兩兄よりも多けれ共何から何迄弟分にて約四十年間學生時代より弟分として保護を受けて來ました、翁は素より研究所の今日あるは全く兩兄の賜物であることを深く

確信する所であります。

第三は貝と櫻と蟲の三兄弟で長兄は京都の平瀬與一郎氏其の有名なる貝類館は不幸にして閉館されたるも次兄の法學士池長孟(神戸市兵庫)氏は有名なる植物大家牧野富太郎氏を招きて池長植物研究所を設けられ目下夫れく準備中なれば國の華たる櫻に當る池長氏の植物研究所の前途は實に見るべきものであると深く想像して居ります、弟分の翁の持ちたる昆蟲研究所の前途は如何に心細き事かお話しになりませぬことであります。

貝は逝き櫻は榮へつゝあるも

虫の命は如何になるらん

右の次第にて昆蟲世界第二十一卷第二百四十二號(大正六年九月十五日發行)講話欄にある「白蟻標本と昆蟲博物館必要の話」と題する一項参照。

## 第二五話 故森文部大臣に献上の額面

四五



故森文部大臣に献上の昆蟲標本

明治二十年十一月二十二日故森文部大臣が地方巡視の際岐阜縣岐阜尋常中學校へ巡視せられました、翁は中學校奉職中なれば澤山の昆蟲標本を陳列して大臣の御覽に供しました其の時翁に説明せよとのことなれ共恐縮して容易に言葉も出でませぬ様なことでありました、結局何か昆蟲標本の額面でも献上せよとの時の小崎知事の命令もあれば直ちに各種の昆蟲を以て意匠は國旗を形とりました、其の下部に十一月頃蓬に發生のヨモギハムシの雄蟲を集め來りて文字を現しまして首尾能く献上を致しました、然るに大臣より或る時 皇后陛下の天覽に供せられましたる所御意に叶ひ手許に止め置くとの御意にて遂に宮内省の御用品となりたる由小崎知事へ内意を傳へられ尙同様のもの二、三個を造りて献上せよとのことなるも時節柄昆蟲採集に不便なれば遂に其の儘となりましたのは實に遺憾のことでありました。

## 第二六話 家族の昆蟲採集

翁は農學校の生徒の時から昆蟲採集をなし、卒業後も繼續して昆蟲の研究に没頭しました。中學校或は師範學校に教鞭を採ることになつても同様職務の傍ら同様であつたから自然家族のものも手傳ふ様になりまして、小供の出來た後は愚妻が長女貴を小守か長男正を脊に負ふて晝尙暗き忠節林に夜間採集を試みたことは度々であつた、或る時などは其當時昆蟲採集に熱中して居た學生が夜間採集に同伴して呉れどの希望を入れて採集に出掛けたのである。處が晝尙暗き林中のこととて乞食が林の一隅に蚊帳を吊りて寢て居ることも知らず靴音高く近くと彼等は驚いて警官かと思ひ只管救を求めた其異様なる聲に同伴した學生は暗中突然なるこの出來事に驚き顔蒼醒めて早速言葉もなく飯宅しました。其後は最早一度も夜間採集に同伴の事は一切請はれなかつたことがありました。郷里にある父母も健康の勝れざる所から自然昆蟲採集でもしたらば新鮮なる空氣に觸れ適當なる運動にて衛生上宜しからんと考へ早速其の意を通して同居することになりました。然るに幸ひにも案に違はず日々の採集に健康でなかつた父は非常なる健康體とな

り、常に昆蟲採集の自然の樂園と思つて居た滋賀縣の伊吹山にさへ朝一番列車にて岐阜を發し其の當時の春照驛に着し伊吹山中の採集を終日爲し終列車で飯宅するまで殆んど晝夜兼行で手傳つて呉れました。而して父は又昆蟲採集の傍古人の昆蟲寫生圖の寫生をもして呉れました。

門前の小僧習はぬ經を讀むと謂ふ古諺にもある如く家族全部が手傳で昆蟲採集並に研究に従事して居たので自然小供まで蟲のことに注意を拂ふ様になり土を掘りて昆蟲採集を爲すことを見て愚息正の如きは幼時の際木片を持って土を掘り起して蟲を見出せばメ、メ、とは幼きもの、蟲を指して稱ふる代名詞なり」と謂ひて蟲を探して居りました。或る時など門柱の下部を掘りまして將に門柱が倒れんとしたのには驚きました、小供の時は矢張り蟲を好むものであります、そして愚息も農學校卒業後に専ら昆蟲を工藝美術上に應用することに没頭して居ります。

又愚女貴の如きは昆蟲研究上必要な寫生圖を作る爲めに畫工を雇ひましたら見真似

に昆蟲の寫生圖を書く様になりましたがこれを見ても人は眞似をして居れば自 其の事  
に出來得るものなる事を感じました。

斯く翁は家族一同の手傳に依つて昆蟲採集並に研究に意を用ひて居りましたけれども其何  
分中等學校に教鞭を取つて居る傍らの仕事でありますから思ふ様に採集なり飼育なり出  
來ません。故に誰か親族の中から信頼すべき人を得て養成して見たいと考へ來て貰つた  
のが當時の名和技師即ち梅吉であります、梅吉は其當時まだ十三歳で椀白小僧であつた  
が翁或は家族のものと採集に出掛け又多くの昆蟲飼育をなし又炊事の方も相當に手傳つ  
て呉れました、そうして昆蟲採集其他の手傳の傍ら非常に苦學をして師を取らず全く辭  
書と首引をして英書の一部を了解する様になりました、その内相當の年輩に達したから  
翁の女婿と致しました。

翁は自分に渡米する考へであつたけれども年も取つて居るから若きものにとて遂に女  
婿である梅吉を去る明治三十五年の十月に渡米させましたが費用も十分でなかつたから

苦學同様に一通りの研究調査を終へて同三十八年の三月に歸朝致しました爾來今日に至  
るまで翁を補けて昆蟲研究に没頭して居るのであります。

右の如く家族皆昆蟲採集に従事して研究の歩を進めて居りますから自然去る明治二十  
九年四月研究所を創設以來所員として陰に陽に手傳つて下さる方々は皆家族と思つて献  
心的に努力して貰つて居る次第であります。

## 第二七話 昆蟲標本の爲めの借家

翁は學校奉職中俸給の少きにも拘らず比較的大きな家に住み居れば世人は名和は贅  
澤であると申す人多ければ眞作博士には常に翁の立場を辨解されて、名和は自分の住む  
爲めに借家せず大切な昆蟲標本を保存する爲めの借家であります、實を云へば名和は  
昆蟲標本の間に住むと申すのが眞當であると申されたことでもあります、恩師眞作博  
士の辨解こそ實に難有感するのであります。

### 第二八話

#### 桂樹翁の自然界

(小動物園)

祖父桂樹翁は約一千坪の庭園内には各種の植物(果樹等多し)を植へ恰も植物園の如し尙各種の動物として養鶏、養魚其の他金魚、小鳥等實に數十百種の動物を養ひ恰も小動物園であります。故に翁は小供の時より動植物の名稱は澤山に知つて居りました其の内特に多きは薔薇の種類でありました。

### 第二九話

#### 箕作博士の奇問

曾て故理學博士箕作佳吉先生より翁に對して君は生前が永きか死後が永きかとの奇問を發せられました、そこで其事は知りて居りますと申せば如何様に知り居るとの反問であります翁も死後の永きとを知り居ると申せば夫れで宜し君の仕事は生前の短き間には成功困難なれば死後の永きに於て始めて成功するものと信するのであると申されました

第二十圖



箕作博士の肖像

世人多くは死後の永きを知るもの少し君の其事を知り居れば安心であるとの有難き言葉を頂き遂に忘れたるとは全くありませぬ恩師故箕作博士の爲め翁の今日あるは多大の原因となりて居ります。

(十二年八月廿四日記す)

### 第三〇話

#### 昆蟲小學校教師

翁は昆蟲小學の教師となりて最低級の昆蟲思想を普及せしめて兎も角國家經濟を亂す所の害蟲を防除せんことを最大目的と致して居ります故に専ら應用的昆蟲學を研究しま



したのであります、献身的昆蟲研究の最後の希望は徳性を涵養すること同時に宇宙の微妙を了解して徹底的信仰心を富すのであります、故に小學校を始め幼稚園又は家庭の幼児に勉めて面白く自然界を了解せしむる様のことを平民的昆蟲學を主張して普及せしめたいのが天職であります、然るに松村松年博士の始めて留學を命せられて出發せらるゝ際には特に岐阜へ立ち寄られたるを以て同志者の集りて送別會を開きました其の席上翁は博士に對して歐米漫遊の上は是非世界的昆蟲學大學者とならるゝことを希望致します、夫れ迄に翁は極力多數の人に對して初等昆蟲學を普及せしめ置く決心であるとの希望を親しく述べて行を盛んに致しました、然るに飯朝後博士は翁の豫想以上の大成功にて今日の博士は實に宇宙まで征服さるゝの概あれば翁の最も喜ぶ所であります、是に反して翁は相變らず田舎住ひの初等昆蟲小學校教師で、又其の儘一生涯を終つた方が寧ろ翁の一大名譽であると考へて居ります。

蟲(中)學にありて小學教師なり

退學すれば大學となる

蟲學に入りて始めて小學生

退學すれば大學となる

白蟻翁此の世の内は小學校

死せば始めて大學に入る

理想的蟲の博士の出來たるは

世界にはこることもうれしき

蟲博士氣焰の程は宇宙まで

征服されし感もありけり

蟲博士昆蟲界を呑み盡し

是より宇宙征伐をする

始めより死ぬまで蟲の小學で

教へ得たりし人の多きは

### 第三一話 恩人土屋大夢先生

五六

第三十圖



土屋大夢先生の肖像

に目下存在の記念昆蟲館を明治四十年六月先生の力にて新築されました、大夢先生の御話しの内にコロンボス世界博覽會の節視察に行きたるに日本の出品中個人の出品として

明治三十九年五月鐵道五千哩祝賀會が名古屋に開かれたる時五月十一日に長良川鵜飼に各新聞社員を岐阜市より招待したる際大朝社の土屋大夢先生も來られまして多分翌十二日特に當研究所を訪問ありまして種々昆蟲の件に付き質問ありたる結果遂

名和靖、又政府の出品(文部省)として昆蟲標本製作者は矢張名和靖とあり。又一千九百年佛國巴里に於ける博覽會にも同様政府の出品(農商務省山林局)製作者は名和靖、又個人出品として矢張名和靖とあります、日本にも不思議なる物好きの人間ありと思ひ歸國の上は是非一度面會したしとの希望を持つて居りましたが何分多忙の爲め遂に其の儘となり居りました然るに今回は好期なりとて訪問しましたことでありました大夢先生には陰に陽に多大の厚恩を受けて當所の今日あるは先生の賜であります、所員たるもの永久に忘却してはなりません。

### 第三一話 本邦理想の觀音様

茲に現す所のお觀音様は普通なれば白蓮又は紅蓮を持たるゝなれども夫れは印度のごとで日本化されたる上は蓮花を櫻花とするを以て理想と致します、特に蠟燭台になすことは愈々平民的にて最下級のものとも接近して鴻大無邊の所迄慈悲の光明を與へらるゝ

五七

第十四圖



本邦理想の観音様圖

の有り難きこと深く感ずるのであり  
ます彫刻者は例の辻壽山氏の謹刻で  
あります無論木材は一千二百年前の  
蟻害檜材であります。

観音は平民的の佛けさま

信仰すれば福壽圓滿

### 第三三話 鳳蝶院釋規矩

當所に献身的盡されました長野菊次郎氏は再び得難き篤學者であります然るに大正八年遂に逝去されましたのは當所は素より國家の一大損害であります長野技師の法名は特別記念に鳳蝶院釋規矩の名を附せられました長野技師の前身時代即ち岐阜縣立岐阜中學

校に奉職中翁と同氏とは約したる事もありて永く大ひに當所に盡力を請ひたる結果渡米さるゝ際にも貧翁なるにも拘らず多少の心配を致して置きました然るに氏の飯朝さるゝや直に客員として招聘しました何分貧弱なる當所の事なれば全く其日を送らるゝ丈けの輕少なる俸給でありました然し無比の篤學者の事なれば實に何事にも模範的に研究されましたのは大ひに敬服しましたのであります長野氏の長所なる蛾類研究を徹底的に準備せしも中途にて不幸を來したるは何事も致方のないのであります遺憾此事でありました鳳蝶死して白蟻に驚戒を與へられたるを喜ぶのであります。

鳳蝶の死して白蟻に將來を

戒めくれし恩は忘れぬ

鳳蝶と白蟻の中の善きとは

他人の方の解る筈なし

鳳蝶よ暫くお待ち下さいな

白蟻も蝴蝶に化してお供致さん

鳳蝶と共に蝴蝶となりまして

中善く宇宙飛びやまはらん

此邊で止めて置くのが花である

其花手向け靈をなぐさむ

### 第三四話 銅像と土像

某々氏等は是迄翁に對して銅像を建つる事の話ある度に誠に迷惑を致しました翁は銅像は近年一種流行的となりました様で慥に一種の弊害であると思ひます故に銅像は絶対に希望致しませぬ故一笑にして置きました然るに最近翁の壽像云々の事起りたるを以て是れは大ひに考へものなれば曾て人造石を以て一体の觀音像を造りたるものあれば一層の事人造石云々と云へば永久的にあらずとの説も出でたれば直に京大の武田工學博士に

第五十圖



昆蟲翁壽像の模圖

問ひ合せたるに羅馬に残り居るものは二千年前のものであると申されました但し酸類は人造石破損さするも酸類少ければ相當の耐久力はあるとの事に意を強くしました其後東大の村川文學博士に面會し其話をなしたるに銅像は一朝事あれば兵器等に使用さるゝを以て却て永久保存には不利益を來す事もありと申されまして愈々翁の主張せし通り一大弊害ある銅像よりも却て人造石の方なれば耐久力もあり保存も出來且つ貴重なる金屬を消費し然も製造費は極めて僅少なれば翁の理想は全く茲にあれば直に賛成をしたのであります。

流行の銅像よりもお手輕の

土像位が身分相應

土像でも永久的で保存まで

出來得るなれば満足である

手植せし大樟樹下に南面す

位置は誠に申分なし

御慶事の記念に除幕の式あれば

記念中の記念ともなる

翁は何事に依らず人の糟粕をなめる事は大嫌ひなれば殊に弊害のある流行と聞けば愈々閉口致します若一翁の理想が吾が國に利する事あれば翁の最も喜ぶ所であります

無學者が獨創的の土像でも

流行ものとなればうれしき

### 第三五話 衣食住と大和魂の所在

吾々に取りて尤も大切なる大和魂の所在地を久しく尋ねて居りますにほとんど不明の様で誠に遺憾と致して居ります。

第一 衣服の原料は申す迄もなく印度又は米國渡來の木綿又は濠洲産羊毛等であります兎も角外國産の原料衣服が出來ますのであります。

第二 食物も多くは外國品が漸次年は一年と多くなる様に考へられます。

第三の住宅即ち家屋建築材等も多くは外國産が多くなります。

以上の如き衣食住とも外國産となれば其國体に宿る所の大和魂も何んもなく宿り心地も自然悪しくなれば漸次別天地へ移住する事となれば残り居る肉体も實に死体同様であれば何事も眞面目の仕事の出來様等はありませぬと考へられます誠に心細き事であります  
(衣) 衣るもの、原料如何にと問はるれば

外國もの、木綿羊毛

(食) 年々に瑞穂の國の米よりも

外國米で命つながらん

(住) 吾國の木材高く外國の

廉價の材で住居出來得る

衣食住共に外より來るもの

大和魂すみどころなし

魂のなき人等のする仕事

眞面目の事の出來る筈なし

右の次第にて國を亡すものは敵國にあらずして寧ろ自國民である様に考へられますは心細きことであります愈々平和の忠臣が必要となりました。

### 第三六話 外國文の報告書

學者が自分の博學多識等を衒ふ爲めなるにや最も有益なる研究の結果は却て邦人の讀み得ざる外國文即ち英文なり獨逸文なり又は羅甸文にて書き外國人に誇る爲め邦人は知るとの出來ざるは是等は忠臣と云ふべきものなるや随分問題であります然るに翁の如きは無學なれば邦文にても六ヶ敷事は中々了解出來得ざるに英文獨逸文羅甸文等に到りては逆も邦人に知らすよりも却て外人に忠なる仕方にて是れ外國崇拜の一大弊害であります外國人が自國文で書くはあたり前の事であります日本人が邦文で書き外國人が讀み得ぬとて心配する必要は毛頭ありませぬ外國人が日本人の爲め有益の事を日本文で書きたる例は不幸にして餘り見たとはありませぬ、日本人は外國に忠にして却て同邦人に不忠と思ひます、又邦人の青年學生は是等數ヶ國の語學を知りたしとて大ひに苦しみ居ります、夫れ迄に達し得ざる内に神經衰弱を來して折角活動時代に最早病人となり居るとは

誠に遺憾のことであります故に邦人に最も大切に於て最も必要と認めたることは學者たるもの先づ以て邦文にして報告して然る後外國文にて書、外國人に忠を盡されても決して學者の價値はなくなるものではありません、夫れで満足出来ざれば内外兩文にて同時に發表されたきものであります、翁は無學なるも翁の立場として只昆蟲に關する著書のとを申すので無學の翁には大いに不便と感じて居る一人であります翁の外にも遺憾乍ら本邦には随分無學者は多ければ一層邦文の著書は必要であります、昆書已に斯くの如し其他の著書悉く同様の事と信じて居ります繁雜にして且つ困難なる世の中を學者先生様達が一層無學者を迷惑させらるゝ様に深く考へられて居ります何と學者先生等自分の名譽は後にして先づ以て本邦人に善きとを早く知らせらるゝ方宜しき事と思ひます、何故外國人に折角艱難辛苦と多年の歲月と大切な國費とを以て研究の結果を外人に知らすと云ふ道理はない様に考へられます、自費の研究の結果でも外人よりも先づ同邦人に早く知らすと云ふ考へを持たれたならば夫れで澤山であります、名譽ある學者已に自己の名譽

の爲めに却て外人に忠にして邦人に不忠となることは無學の翁の最も恐るべき事と常に心配して居るのであります今後の學者は何事も簡明主義を尊び餘り學生等を苦しめぬ様に願います、國を亡すものは敵國にあらずして自國民であると云ひたい様であります。

外人の長所を取るは善けれ共

心酔するは悪きことなり

邦人の外人崇拜恐るべし

同邦人の大の不利益

### 第三七話 實物寫生

翁は元來實物寫生を好みて日記帳を見れば殆んど毎日の様に二、三圖より時には十數圖も作りました中には着色圖もありて中々後日の參考となりました、然るに大震災の時

圖六十第



圖の生胎蟲蚋

過半を失ひたるは如何にも残念の事でありませう、實物寫生の必要は慥に認められたのであります、青年諸君へは特におすゝめ致します。

### 第三八話 萬能主義

翁の祖父桂樹翁は昔今云ふ所の小才子にして何事でも出来れば是と云ふ程の學者でないが四書五經並に唐詩撰を讀む位で基は田舎の初段位と申して居ります俳句は中々やり

圖七十第



圖生寫のシムウザゲヒ

ました。鐵砲上手で火繩銃にて然も散彈にあらず一丸にて美事に殆んど百發百中と云ふ有様にて夕方一寸一時間も近傍へ行けば小鳥十羽二十羽は譯なく銃殺致します其小鳥の持役は翁の小供の時でありませう其際鳥の名稱は數十種を知りて居りました又魚釣りも上手にて常に行きます其網にて捕獲すれば魚類の名稱も鳥と同様に能く知りて居りました文字は尤も能筆であり何んでも出来る故却て一事を貫く事の出来ないのが大の欠點にて遂に一人前の人間となれないと常に申して居りました故に翁の小供の祖父より萬能きゝの一身叶はずで却て宜しからざれば寧ろ馬鹿の一つ覺に



て宜しければ何事でもよいから貫行して上達せよと常に聞かされたのが遂に昆蟲學に志を立て、幾多の不幸を重ねたるも遂に意志を替へる事の出来ないのは慥に祖父桂樹翁の注意でありましたのであります翁の今日あるは全く祖父の賜物であることを忘るゝ事は出来ないであります祖父は七十三歳を以て死去し父は七十歳なるも翁の餘命は旦夕に迫り居れば途手も祖父や父の年齢迄は六ヶ敷事と覺悟をして居ります何事も神佛にお任せ申しますより外にはあませぬ。(八月二十七日午前記す)

### 第三九話 一 等 國

日清、日露戦争の結果遂に自他共に我國が一等國になりたる様に考へ居るも誠に寒心の至りであります翁は假の一等國と思ひ真正の一等國とは思つた事はありませぬ恰も富豪の青年が賣笑婦の爲め大切な金銭を亂費すると同様一等國と云はるゝ内に虚榮心を高め一も外國二も外國品と云ひて年々外國へ莫大の正金を失ひ漸次貧血症となるは如何にも遺憾であります。

戦争で一等國となつたるも

ハイカラ的で油斷大敵

富豪家の道樂息子賣笑婦

お手に受くるは金がほしさに

世界より一等國とおだてられ

勝ちて兜の緒をしむるかな

### 第四〇話 吾 唯 足 知

翁も人間の事なれば全くの無慾者にはなく國家の爲めには大々的の多慾者であります其の暫個人とし 全の寡慾者にて月給は 圓にても二十圓又は三十圓にても遂に不平を云ふた事はなく只職務に忠實にと心掛けたのであります、現に目下の如き發病後滿一

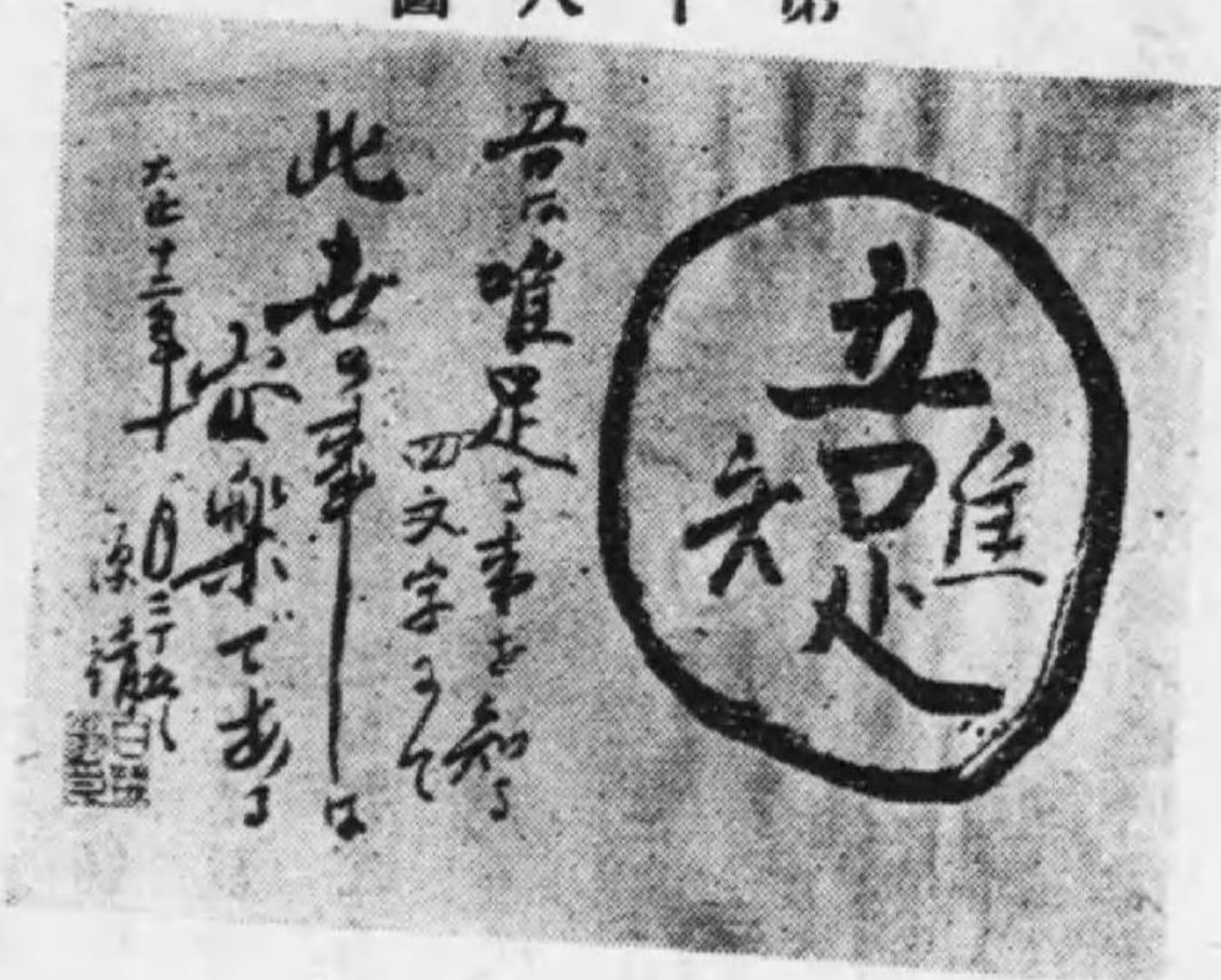
ケ年後の今日病床に伏し居るも何一つ不足と思ひたる事はありませぬ何事もありがたく此世の極樂と思ひ喜びて居ります尙餘命のあらん限り國家の爲め盡したいのであります。

まだ餘命少しはあつたと思ふなり

餘命のあれば國に盡さん

(大正十二年八月二十六日正午晴記)

第十八圖



座右の銘の圖

### 第四一話 鐵道院囑託

翁は明治四十三年十一月鐵道院より白蟻調査の件を囑託せられしより己に十三年とな

ります月手當として五十圓を受けて居ります年數は經過しましたが是と申す成績のなきを恐れて居ります然るに與へられます五十圓の月手當は初めより當研究所の經費に加へよとの當局者の御命にて今日に到りて居ります翁は所長として年俸一千圓を給せられま

す故鐵道院の年額は六百圓となれば併せて一千六百圓の年俸の様に世人は認めて居ります其實差引すれば所長の年俸僅かに四百圓であります十三年間の手當は一ケ年六百圓で十年間六千圓三年間一千八百圓併せて七千八百圓で利子を算すれば一萬圓前後となると思ひます。

月々の五十を積みれば自づから

今日迄に萬となるなり

右の次第にて兎も角も翁の正當收入すべき金額を以て研究所の維持をなしたるも寄附の名義にてもなく言へば當時の當局者の手心でされた事で翁が不承諾なれば決して出來得ぬ事であります不承諾を申せば當所の收支豫算の出來ざれば不承諾の内に承諾したの

で今日に至りましたのであります。

永年の間の調査不成績

何んと云ふても申し譯なし

七四

## 第四二話 一等乗車券

翁の如き田舎の無學者が始めて官線一般の一等乗車券を貰ひ受け年々幾千哩と云はず白蟻と聞けば晝夜兼行にて何所へも行き無學者でも實地研究を始めまして漸次白蟻の事を知る様になりましたのであります最初一等車に乗るも何んとなく赤切符稀に青切符が俄に白切符と早替りであればなんどなくきまりも悪しく遠慮に遠慮をして來りました兎も角衣服は粗末其他は赤切符に相應して手荷物なく只採集用具を納めある小形のカバン一個と洋傘あるのみで他の乗客よりは誤りて赤が白に乗りたるやと顔を眺め給仕も車掌も通行の際横目に眺めます其内に必ず切符改めが始ります、他の乗客は今に見よ小言を

食ふであろふと云ふ顔付で翁の方へ注目を致します切符改めも無事に済めば先づと思ひて喜びます其内に車掌と悪意になると乗車すると先生今回は九州ですかと申せば今度は乗客の方が變なやつが乗つたと云ふ様な顔を致して居ります一等切符も結構なるも翁の如き不徳者には不適當と考へ心苦しき事で多く寧ろ乗り心持ち宜しからざるともありました何事も平民的が宜しきことであり勿体なき事でありました今回の病氣は發病の原因は寧ろ防蟻の爲めよりも薩摩守の爲なるやも知れずと考へて居ります。

此度の病氣のものは蟲ならで

薩摩の守のたゞりなるらん

赤青が俄に白となる時は

釣り合悪しく心苦しき

## 第四三話 基礎學なき狂歌

翁の無學文盲なるものが狂歌とか何とか申すもの、出來様筈はない何等基礎學なきも

七五

のは本歌は素より狂歌も容易に出来得ざるものと信ず、若しも出来たら己に昔しより狂人呼ばはりさるゝ所の翁のことなれば或は狂歌に似たる位のものかと信じて居ります。

本統の歌の讀め様はずはなし

若しも讀めたら狂歌なるらん

狂人が狂歌よむのはあたりまへ

本歌讀めたら間違である

基礎も知らぬ狂人歌を讀む

是ぞまことの狂歌なるらん

無鐵砲狂歌と思ひ讀む歌は

翁自身もおかしかりけり

若しも人は等の狂歌見る時は

翁の狂人間違はなし

此の頃は狂歌めきたることを云ふ

病氣の爲の藝語カウポトである

#### 第四四話 白蟻雜話を白蟻翁雜話と改題

白蟻雜話は第一回第一は明治四十三年十二月(昆蟲世界第十四卷第百六十號)に始まり第一三五回第一四四八は大正十一年九月(第二十六卷三百號)で全く終つたのである。白蟻の研究は未だ全く終了したのではないから續々掲載し得るところの材料は無盡藏なれども最早白蟻に關する多方面に就いて述べたるを以て此際白蟻雜話の題名を廢して新たに白蟻翁雜話と改題し白蟻翁餘命のあらん限り白蟻に關する事は勿論其他翁の直接間接を問はず多少とも感じたる事は例の秃筆に任せて愚見を記して諸君の御教示を請はんことを希望するのである。

右の次第でこれを深く考へるに今まで述べ來つた白蟻雜話は其範圍狭く執筆するにも

何となく拘束的苦痛を感じましたが今後の白蟻翁雑話は其取るべき材料の範圍は鴻大無邊にて宇宙的となり實に愉快のことでありませう、例へば白蟻雜話は顯微鏡的であつて白蟻翁雜話は望遠鏡的であつて、白蟻雜話を地獄とすれば白蟻翁雜話は極樂の境界にも比す可きであります。

白蟻雜話は狭くて廣し顯微鏡的心する

翁の雜話は宇宙に等し望遠鏡に能く似たり

顯微鏡的白蟻の雜話心苦しく書き來る

翁の雜話は望遠鏡で宇宙の廣きことまでも

顯微鏡的なり白蟻の雜話翁の雜話は望遠鏡

何となく世界が狭し顯微鏡望遠鏡なら宇宙まで

顯微鏡なら地獄に等し望遠鏡では極樂世界

右七首翁は始め狂歌の如く考へ折角作り來りしも全く脱線的の歌にて今更何共致方な

ければ改題の動機をそのまゝ記して、翁の無學を告白致します。

狂歌ぞと思ひて讀みし歌までも

何時の間にやら脱線をする

#### 第四五話 恩人本山松陰先生

本山松陰先生は大毎社長本山彦一先生の事であります、翁は松陰先生より受けたる鴻恩は陰に陽に多大なるものにて途手も筆紙に盡し得ぬのであります、當所並に翁の今日あるは同先生の全くの賜であります仮令死するも忘るゝ事は出来ませぬのであります多謝々々

#### 第四六話 白蟻三昧の動機

去る明治四十三年八月當時會計検査院長子爵法學博士田尻先生が偶々岐阜へ御來遊の

際圖らずも面會を得たる時同博士の話に「名和よ白蟻の被害は多大なるものだナ―陸軍で一ヶ年に失ふ所の費額は約三百萬圓だ之は恰も陸軍一師團を喰つて仕舞ふのと同じだ、名和之を防ぐ方法に就いて何んとする」と恰も叱り飛ばさるゝ様な有様で質問があつた、其當時早速何んとも御答へする事が出来なかつたが兎も角何んとか一言の答がなくてはならぬ、故に翁は斯く答へた、「從來多年昆蟲研究に従事し居る間受けたる所の質問は常に農作物の害蟲驅除に關する事のみで白蟻驅除の質問は全く始めてで何とも御答が出来ないが將來白蟻に關し大に研究した上で確なる御答をすることに致します」と謂へば博士は膝を打つて「ヨシ名和大にヤレ」との事であつた、此の博士の質問に依て白蟻被害の甚大なることを悟ると同時に大に之が驅除豫防研究の必要を心底に感銘したのである、世の中のこととは總て刺戟に因て研究もされ實行も出来るものなれば、翁も之を動機として白蟻の研究に従事することになつた。然るに同年十二月に圖らずも鐵道院から鐵道線路及び建築物に對する白蟻豫防法研究事務を囑託と同時に院線のバスを受けた

から大に喜び之れ全く白蟻豫防の研究をなすべく興へられたものと考へ、爾來全國至る所に出張して調査の歩を進めて居るのである、而して此の研究が進むに連れ、最初は昆蟲翁と稱へたものが何時の間にか白蟻翁と變名して白蟻防除上實見したる模様を、長き間昆蟲世界誌上に「白蟻雜話」と題し掲載し全く白蟻三昧に入つて居る次第である。

#### 第四七話 觀音三昧の動機

翁は大正六年に還曆に達しました、其際何か還曆の記念事業をなしたい考への所幸ひ其歳の一月一日の年賀狀に代へて大阪毎日新聞社長本山彦一氏より歴代帝陵參拜案内圖を頂き之を拜見して非常に喜ぶと同時に九十帝陵を參拜することを思立つた、然し時期恰も寒氣の候であつたから多少春暖を得てからと思つて居た際老へ附いたのが四月八日は翁が地方の學校を卒業した記念日でもあり、且又佛祖釋尊の御降誕日であると謂ふ所から終に同日を以て最初となし參拜することに決めました、即ち此の日第一代神武天皇

の御陵参拜を初めとし順次各帝陵に参拜することになりました、斯くして九十帝陵を約二週間餘に参拜し終るの光榮を得ました、最も此九十帝陵参拜に附隨しての翁の心願は九十帝陵は勿論帝陵と帝陵との途中に存在しある有名なる神社佛閣にも参拜して白蟻の有無に注意をなし、若し之を發見せば出來得る限り當局者に面會して白蟻防除に關し御相談をして該處の防除を爲し有名なる社寺の永遠に保存されたいことであつた、所が四月十一日第十一代推仁天皇の御陵に参拜の際は餘りの早朝であつたから先づ其の南隣なる唐招提寺に参拜した境内に一人の僧侶あり尋ぬれば管長北川智策師であつた、白蟻に就きて談話を交はして見ると當時恰も金堂に安置しある國寶たる御丈一丈八尺の手觀世音菩薩大修理中であるとのこと、若しや白蟻の被害に關係なきかとの疑を以て早速同師の案内にて御尊像に接近して見ると、こは如何に間違もなく過古の白蟻被害であるのを確認された斯くして居る内に其修理の主任技師菅原春月氏が参られ白蟻被害のことを御話すると同氏の謂はるゝには、之が白蟻の被害だとすると從來各所に於て修理し

た佛像中には斯の如き状態のものが屢々あつたとの話、兎も角此の儘修理して置かれても防蟻の方法を加味して修理せざれば再び蟻害を受くるに至らんとて種々協議の結果再會を約して販つた、そうして後數回同地に出張して防蟻上に關し御相談相手となり最も完全に修理されたのである、菅原氏は之が記念として何か呈したいとの意見を以て終に同尊像修理の際取り出されたる心木を以て御長け六寸の六臂如意輪觀世音菩薩を彫刻して下さつた、夫は當時記念昆蟲館内の白蟻觀音堂の御本尊として安置してありますものです。

還曆記念事業として九十帝陵参拜と同時に有名なる神社佛閣に参拜を思ひたら其の歩を進めて居る中、最も尊き國寶たる千手觀世音菩薩に白蟻被害があつたのが因縁となり、六臂の如意輪觀世音菩薩を頂く事ともなり因縁が千手觀音に基く所から自然千社詣ふでを發願致しました各社寺に参拜の際白蟻被害の木材を頂いて來て之を御長け一寸八分の合掌觀音に辻壽山氏に依頼して彫み、兎も角一千躰を完成せしめんと欲し、今日迄には

約六百体も出来ました、が不幸にして病魔に侵され病床にある譯だが、病床中に於ても病氣全快の上は尙繼續して、千社寺詣をなし千躰に爲さんものとして一刻も忘るゝ暇がありません。然し若し千躰に達せず此世を去る場合は、之を出来掛の千躰観音と稱し此の世の置土産として残したいと思ふ之が抑も観音三昧に入つた動機的一端であります。

#### 第四八話 櫻三昧の動機

各地方に於ける多年白蟻調査中、名木は勿論櫻の種類に就き、白蟻被害の有無に注意したりしに、名木及有名なる櫻は殆んど白蟻に侵され居るばかりでなく亦各種の菌蟲兩害を受けて居ることを實見した、元來櫻は國華と稱せられ、本居宣長翁は

敷島の大和心を人間はゞ

旭に匂ふ山櫻ばな

と歌はれた、此の國民性を有して居る櫻は世界に比類なきもので標語にさへ「櫻は國

の花」或は「櫻を守護せよ」とまで謂れて居る、然るに各地方に存在する櫻は殆んど菌蟲兩害を受けざるものな、就中山櫻或は里櫻を論せず種類の良しきもの程其の被害が多い様に見受けられた、故に此の國民性を有して居る所の櫻の保護を深く感じたのである。然し之が保護には先づ以て菌蟲兩者の研究の必要あり夫には各種の櫻を集めて比較研究を爲さねばならぬ所から、今日までに集めた櫻の種類は既に數拾種に及だが就中各地方から櫻の中特に良種と認めらるゝものを三十三種を撰んで之を観音櫻と稱して居るのである。

植へ置きし観音櫻後の世に

御國と共に榮わ行くらん

珍らしき御國の花を集め置き

観音様に捧げ奉らん

斯く國民性を有して居る櫻が、菌蟲兩者の爲め侵害を受け受け衰弱又は死に類せんと



するものあるを白蟻調査中に各地方に於て散見したから、之が保護の必要を深く感じ、右菌蟲兩者の研究を爲さんとして各地より櫻の種類を集めて栽培するに至つたのが遂に櫻三昧に入つた次第である。

故に病中と雖も櫻と之に發生する菌蟲に關しては忘るゝ事が出來ない、所から昨年十月五日に他より良種の來たことを聞き小康を得た際として醫師の許をも受け約二時間に涉つて椅子に腰を掛け栽植模様を見て居た、然るに翌六日朝になつて見ると不幸にも半身不隨の状態となつた、而して同月二十日前後には病勢重り主治醫も最早今回は駄目であるとの言葉をされたと云ふ事を後に聞いた程であつたが、幸にも主治醫始め家族の篤き看護と觀音様の御加護とに依り亦追々と輕快に赴き萬死の内に一生を得て昨年末より新年早々には室の内外を多少歩行し得らるゝまでに至つた。

然るに豫て櫻には寒肥の必要を聞いて居たから自分の病中排泄した尿水の溜めて置いたものゝあるを思ひ付き一月五日に積雪足を没する所を家人の助力を得て自分に栽植し

て置いた天下一品とも稱すべき櫻に寒肥を與へたのである。其の時は何んともなかつたが翌六日に至つて見ると亦々半身不隨となつた、月こそ違へ同じ六日に同様の破目に陥つたのは不思議であるが、誠に残念である、最早此儘病死したならば自分の靈魂は櫻に宿る様な心持ちがする、故に

我死なば觀音櫻を宿とせん

花見にござれお目にかゝらん

と口ずさんだのである、其の後大阪毎日新聞には「櫻よ、さくら私は櫻と心中するつもりです」と亦濃飛日報には「此儘死ねば櫻と情死だ」と題し書かれたのである、然し七轉び八起きと云ふ事があるから今後十分靜養して醫師の力は勿論家族並に觀音様の御加護に依り三たび全快したならば國民性を有する櫻の保護の爲めに活動して見たいと思つて居る。

### 第四九話 感謝と念佛

過去を思へば何等之と申すべき仕事は出来て居ないが、無學文盲の翁が是まで行つて来たといふのは全く自分の力ではなく、蟲を通じて観音様の御手引であつたと信ずる。盲にて此處まで來たる白蟻翁

観音様の御手に引かれて

昨年八月病魔に侵されて以來、僅かに小康はあつたが殆んど引續き身体は自由にならず、只意識の確かなる所から、白蟻防除の事やら、櫻の病害蟲防除並に之が保護上に就きて心配をして居る譯である、然るに此病中近き家族、知己より遠き友達其他辱知諸君に至るまで或は慰め、或は忠告して一日も早く全快せよとの厚き御心ばせである、特に此の間は官幣大社淺間神社の林宮司よりは病氣全快の御札を頂戴し、又奈良縣日光寺の藤井隆源師よりは殊更御祈禱までして下されたと云ふ譯で實に感謝する外はありませ

第十 九 圖



林宮司より病氣全快御札の圖

ん、茲に各位に對し謹んで感謝の意を表し置く次第である。

翁は一日も早く全快して大に我國昆蟲界に活動したいとの心願を持つて居ます所から手厚き國手の注意を守り、一面に於ては蟲を通して得た所の眞の念佛に依つて平癒を祈つて居る次第である故に今は白蟻三昧、観音三昧及櫻三昧の三、三昧の外茲に念佛三昧に入つて居る、之が白蟻翁今日の日課であります。

### 第五〇話 積極と消極

人間界には必ず何事にも積極と消極のあるものにて特に積極的の方針を以て進めば必ず國家を益し、是れに反して消極的の方針のものは常に不利を來すことの多きを信じて居ります。故に翁の性質として積極を好む様に考へて居ります、今茲に積極、消極の多數中より次の如き六種を撰みて列擧すれば。

消極 地獄。曲線。惡。死。煩悶

積極 極樂。直線。善。生。樂歡

消極の地獄、曲線、惡と死と

煩悶などは吾は好まず

吾が好む積極的の極樂や垂直線に善と生

樂歡などは歡迎をする

## 第五一話 無藝 無趣味

翁は不思議にも自然界の趣味を感じたる後は人爲的に關することは絶対に興味なく祖父桂樹翁の多趣味なるにも拘らず謠曲、茶道、音樂、碁、將棋、生花、詩歌、俳句等頻りに勧められしも遂に實行の出來得ざりし結果學生時代にありても友人等と共に遊びしが元來趣味に乏しき性質なれば友人より揚弓、大弓、落語、義太夫、乘馬其他種々なることを勧誘されしに少しも氣に進まず寧ろ夫等の談を聞くも頭痛を來す程にて甚迷惑を感じました故に休暇は成る可く是等の勧誘を避くる爲め土曜日には學校より西方三里ある郷里へ徒步にて必ず植物と昆蟲を採集するを無二の楽しみとして飯宅しましたる後は家人特に祖父桂樹翁の喜ばしき顔を見れば直に樂園とも稱すべき廣き庭内にある動植物を愛護研究して楽しみました翌日即ち日曜日の夕方迄には必ず學校へ歸りました其愉快なることは今も眼前に出現して居ります。

右の次第にて卒業後一人前となるも他人との交際は極めて下手にて何か宴會でもあると皆々十八番を出すも翁には何一つ隱藝もなければ手持無沙汰であります、實は煙草も

幼少より絶對的に用ひませぬ若しも一吹くでも吸へば一時間位舌は麻痺して食物の味はひも分りませぬ現に隣人の煙草の煙には大々の閉口して早々他へ轉ずるを常と致します。

斯くも無趣味無藝なるも親友林茂君の五目並べの達人なれば圍碁の弊害よりも時間僅少にて他人を妨ぐる事比較的僅少なれば是れ丈けは興味を以て教へを受けたる結果何時の間にやら中々上手になりました。故に萬一圍碁の談でも出づれば五目並べで事を濟しました。此の他に獨特なる隱藝があります、夫れは腹力で繩を切るので名和の繩切は随分評判されたのであります。其事は酒宴の際皆々藝盡しの出づれば各自得意の歌とか手品とか踊りとか何とか順番に濟みて翁の番となるも全くの無藝なれば手も足も出でざれば止むを得ず一筋の繩を持ち來り假令嚴寒の頃にても肌を脱ぎ腹部を現して荒繩にて腹部に巻き付け腹を縮めて繩を引締め一氣に腹部を膨張せしむれば直に切斷致します是れが翁の隱し藝であります。

或る時徒らものゝ爲めに非常に迷惑しました初め繩の細き爲め容易に切斷せしも段々太きものを持ち來れば容易に切斷せざる其際敗す嫌ひの翁なれば成るべく長き繩を持ち來れど命じて兩端を二人の酌婦に持たせて腹部を極端に縮め一氣に切斷の結果兩婦人は見事に倒れました事もありました随分其様な徒らをした事もあり之れで無藝を誤魔化しました。

無趣味でも五目並べは得意にて

隱し藝では腹で繩切る

腹の繩切は一種獨特にて恐らく岡田靜座先生の慥に参考となりたるものと信じて居ります、翁の今に餘命のあるも腹力強き爲めかと思ひます。

## 第五二話 三猿主義

昔より三猿と言へば見ざる聞かざる言はざるとの事を誠しめたる様であります。然るに

今日は昔と異りて其反對に大ひに廣く見ると聞くと云ふ事でありませう或日の事遠方より某來客ありて種々彫刻に關する談話中彫刻の名人辻壽山師幸ひ參られたるを以て紹介し

圖 十 二 第



當 世 三 猿 の 圖

ました、圖らずも某客人には辻彫刻師に對して今日の三猿彫刻方を依頼されましたるに快諾あれば翁には直に彫刻木材として千二百年前即ち天平時代の唐招提寺の蟻害檜古材を呈しました其後彫刻料は拾圓乃至拾五圓との事を申し來れば其由直に某氏に報告し置きたるも回答なき内に彫刻は已に出來上りて六月末日に持參すとの事なれば某氏へは再び其由報じ置きたるに今回の來書中に私財政上甚だ御氣の毒に存じ候へ共餘

り高價なるものは購入致し兼ね候に付成る可く安價なるものを御願ひ申入れ度と存じ候との事でありませう、彼是れする内最早約束の日來りて現品持參されました、出來の三猿を見るに慥に逸品なれば某氏果して購入するや否不明なれば彫刻者には今後參拾圓にても彫刻は御斷りと申す程熱心を以ての逸品なれば遂に囊底を探りて拾五圓を得て直に求め置きました。其後來客のある度に一覽の上中々好評にて彫刻は幾許ぞ或は貳拾圓？或は參拾圓かと迄申されました、結局滑稽的に翁は僅かに(三圓)三猿と言ひて大ひに笑ひました兎も角某氏の爲圖らずも逸品の三猿を拾五圓で得たのは全く御觀音様の賜物であります病床にて翁は今より今日の三猿となりたのであります。

三猿を拾五圓とは高價なり

其實價ひ僅か三圓(三猿)

言ふことゝ聞くことだけは人並で

心眼あれば宇宙見渡す

約束の猿は高價で買はざるを

引受けざるを得ざるためなり

### 第五三話 恩師故田中男爵

恩師たる故男爵田中芳男先生は岐阜縣可兒郡久々利村の千村藩士で長野縣下伊那郡飯田町に生れらるゝを以て世人多くは長野縣人の如く考へらるゝも全く岐阜縣人でありま  
す、幼より自然學を好み伊藤圭介翁の門に入りて醫を學ばれたるも中途より方針を變へ  
全く幕府の蕃所取調所の命に依りて佛國より依頼の昆蟲採集を命せられ蟲取り御用の名  
の許に箱根山を中心としてあらゆる動植物を採集せられ其の内より蟲類に關するものを  
數十箱に納めて佛國博覽會へ幕府より出品することが出來ました、其の際先生は渡佛され  
ました是は慶應年間でありました其の後明治六年澳國ウイennaの博覽會へは佐野常民公  
に隨行されました是れ先生が博物學の大家となられ且つ博覽會通となられました大原因

であります、翁は明治十六、七年の頃始めて東京市本郷區金助町七十二の御邸を訪問して  
面會するの光榮を得ました其後多年の間陰に陽に翁を助勢されましたるを以て翁並に研

究所の今日あるは先生の力極  
めて大なるものであります。

現に先生より各種有益なる  
標本等を賜りたるもの實に幾  
百數十種なるや途手も記憶し  
得ざる所であります現在昆蟲  
博物館の一部に先生より賜り  
たる遺品の一小部分を陳列し

第十二圖



男爵田中先生肖像と蝶紙製の圖

て先生の厚恩を感謝して居ります茲に示す圖は先生の肖像と並に先生の明治六年ウイ  
ennaの博覽會へ參られたる際求められました特別記念の紙製蝶一箱であります、今に到

るも中々變色もせざるは實に驚くの外はありませぬのであります。

九八

## 第五四話

### 女子のヒステリーと 男子の神經衰弱

翁の發病後は日々多くの人々の見舞を受けましたが其の内女子の多くは例のヒステリーとか申す病氣に罹り又男子の多くは神經衰弱症と異口同音に申されます斯くも血氣なる青年男女共が殆んど病人であるとも考へられます中にはヒステリー又は神經衰弱と云はざれば何か人間の資格の欠けて居る様で誠に心細き事であります、立派なる後繼者として病人の寄り合ひとせば國家の前途は想像し得られます國を亡ぼすものは敵國にあらずして寧ろ國民であると言ひたいのであります。

青年の病氣くと聞く毎に

國の前途は如何なるらん

## 第五五話 櫻現の觀音

翁の友人にして養蠶の大家脇田重太郎氏の令息脇田米根一氏は西洋畫の大家にて青年

第二十二圖



櫻現觀音の圖 (脇田米根氏畫)

畫家として定評があります、然るに本年春翁を病床に親しく見舞はれられた其の際、櫻と觀音と云ふ題の下に靈筆を望み置きたるに幸ひ熱心なる醫師林正一氏の厚意にて意外に早く出來態々東京より持參して翁の病床にて開封して賜りたる厚意を謝する所であります、兎も角翁は特別記念として觀音堂と新設の櫻宮の善き位置を見て記念として奉納する考であります、畫題は不幸にして聞き漏せしも翁の自分免許として櫻現

の観音と云ふ方適當と考へて居ります。

100

## 第五六話 感化救済講習會の科外講話

法學博士の井上友一先生の内務神社局長の時代當研究所觀覽されたる際初めて面會の光榮を得たる後は頻りに厚き同情を得ました、或る年の事内務省毎年開會の感化救済講習會の際科外講話として昆蟲特に害蟲に就き一場の話をせよとの依頼を受けて致しました、其の際翁は悉く内務省構内の植物に發生し居る害益蟲十數種を採集して教壇に立ち先づ無學文盲なる翁のことなれば外國の事情は一切知らざるを以て近き所の例を擧げて一場の御話を致すと前置きし道は近きにあり是を遠きに求むと云ふともあります、今日は諸君に對して悉く眼前に携供して説明しますと申し夫より種々例を擧げ是は内務省入口の築山にある八ツ手の葉に附着し居る有名なる貝殻蟲とか曰く何々、曰く何々と十數種に及べば井上博士には名和よ大底にしてよせよと申されました、そこで外國の例證を

出せば恐ろしきこともあれば確證とならざれば遠き親類より近き隣りで諸君の一々了解せらるゝ様省内にて悉く蒐集しました道は近きにあり是を遠きに求むと申すことを聞きて居りますが省内にかくも澤山の害益蟲の居ることは翁も始めて知りて大ひに驚きましたと博士にからかいましたと詰論して諸君御疑ひの方々は一々實地に於て證明しますと云へば休息時間に教場を出て、一々實驗せられたことは今も尙記憶より去ることは出來得ぬのであります。

外國の遠き例證擧ぐるより

近きところの例を擧げなん

## 第五七話 南瓜の人工媒助

岐阜市に接近せる稲葉郡島村は古來蔬菜地として知られ各種の蔬菜中特に南瓜の栽培が盛んに行はれて居る、去る明治二十九年に大水害を受けた爲め沖積土が多數に畑に置

101



かれたので翌三十年に、今年こそは南瓜の當り年なりと考へ一般に餘計に栽培すること  
 になつたのであります然るに案に違はず沖積土の爲め肥料を施さずとも蔓は繁茂して花  
 も例年よりも多く開いたので一層栽培者は得意であつた、處が多くの花は開いたが少し  
 も結實せないで皆駄目であつた、其處で土地の剽輕なる某は或る朝早く翁を訪ねて曰く  
 先生今年は南瓜の蔓は良く伸び花も開いたけれども一寸も南瓜が止まらず落ちて仕舞い  
 ますとて其理由と結實させる方法との質問でありました、此の時翁は豫て昆蟲と植物と  
 の關係に注意を拂ひ南瓜の人工媒助の事も詳細に實驗して居りましたから、直ちに答ふ  
 るに其不實の原因は調査して見なければ譯らぬが兎も角南瓜が止まれば宜しいから人工  
 で雄花の花粉を雌花に附け所謂花粉の媒介をすれば必ず止まるだろうと謂ひ之に花粉媒  
 介の効果は二十四時間たつと南瓜が下向くぞと附け加へて置いた、某は喜んで歸り近隣  
 の人々に告げたが皆々冷笑に附して實行するものがなかつたのであります、某は翁の言  
 葉の如く實行した所、案に違はず花粉の媒介をなしたものは二十四時間後に至つて翁の

言の如く下向となつたから某は再び早朝にあはたゞしく來つて告げて曰く先生くんと稱  
 へつゝ握り拳を下向にしてコレ／＼南瓜が斯様になりましたとて花粉人工媒助の効果  
 を喜び勇んで報告に來たのであります、故に翁は續いて之から毎朝實行なさいと申しま  
 した、某は實驗の結果確信を得たのであるから近隣のものに岐阜に行つて先生に聞いて  
 來たが南瓜は交接せなければ結實せないとて再び吹聴したけれ共矢張り冷笑に附し誰一  
 人實行するものがなかつたのである、其後或る一人即ち南瓜の花粉を交接せしむること  
 を極めて冷笑したる人の畑に於て多く結實したのを見たから之を尋ねて見ると豈に計  
 らんや餘りに冷笑した手前自ら實行も出來ず半信半疑の中に家内に實行せしめた結果だ  
 と謂ふことが譯りましたとの話でありました。

斯く實驗して効果の現はれたのであるから直に全村に行き涉り俄に南瓜畑も人工媒助  
 の爲め賑かになりましたのみならず面白いことには從來無駄花として顧られなかつた雄  
 花が非常に必要となり自分の畑だけでは不足を生じ來り早朝に人の畑の雄花を盗み來つ

て要領を得て置きながら知らぬ顔を極め込んで居るものが出来たとの事でありました。此の花粉媒助の一事は今でも年々行はれ居る、翁は其當時初成り南瓜二個を禮として某より貰ひ受けました、處が其後南瓜の不結實の原因に就き調査した處結局前年度に於ける水害の爲め土中に巢を作る蜂即ちクロマルハナバチ一名オホマルバチの巢を破壊され全滅に歸した爲め常に花粉媒助の役目を勤めて居た蜂の御見舞がなかつたからだと言ふ事が明かになりました、茲に至りて昆蟲の花粉媒介の効果に如何に偉大なる力のあるかを窺知することが出来ます。

## 第五八話 岡田技師と西澤技手

静岡縣技師岡田忠男君には昆蟲學に對する眞の篤學者にして静岡縣技師として同縣下多大の効驗を擧げられ且つ本邦昆蟲學會へ同じく効驗ありしことは斯界に於ける人々の能く知るところであります然るに不幸にして最早此の世の人でないのは誠に遺憾のこと

であります、該岡田君とは明治二十八年以後屢々三河國渥美郡出張の際には今の豊橋市の小島屋にて必ず出會することを約束しました同君は當時郷里（濱名郡知波多村）高等小學校の教員なれば授業後約三里の所を山越へにて旅宿へ參られ何かと昆蟲に關係する談話を交換して何時も夜の十二時過ぎより歸宅され必ず翌日の授業に差支なき様に歸宅されました實に無比の篤學者でありました今や其の熱心家の此世を去られしは誠に遺憾とする次第であります、次に記する所の滋賀縣農事試験場の西澤技手は浮塵子に關する研究者にして有名でありました同技手も已に逝去されました然るに該西澤大吉君とは明治二十八年京都に於て開かれたる博覽會の節滋賀縣蒲生郡鏡山村の前田村長に懇意になりし結果同村長の招きに應じて同村へ害蟲に關する講演に參りたる際役場の小使に熱心に昆蟲を集むるものありて翁の行く所へ來り頻りに研究せしを以て翁は其の後蟲針等を送りて獎勵しましたる所中々澤山の昆蟲標本を作りて役場にあるのを時の農事試験場長來りて西澤大吉君を前田村長に貰ひ受けられ君は遂に試験場の技手となりて大ひに活動

されたるも悲しむべし天永く命を興へず不幸故人となられました岡田技師と云ひ西澤技手と云ひ未だ年少者に先達たれ翁は餘命を以て以上兩君の事を筆記することは寧ろ不可思議のことでもあります。

(大正十二年八月二十九日早朝記す)

## 第五九話 宗 教

宗教は翁の如き無學にては逆も知ることは出来ぬ様に考へて居ります、然し國民として最も大切のものであることは慥に知りて居ります假令無學でも信仰の一端だけでも受けさせて戴きたいものと信じて居ります、然るに是迄幾多の宗教家の教を受けたるも不幸にして信仰に近接し得られざるの罪は全く翁の不徳の致す所にて面目次第のなきことであります、其の俗人なるも佛教のことを能く知つて居りて翁の病床を訪問して翁に對して頻りに信仰を奨められました翁よ今少しく信仰を進めよと申されますが翁には今少しくと申さるゝのが何の事にや、とんと不明にて信仰は容易に他より侵入するものにて

はなく信仰は或る事より内部より湧き出すものと信じて居ります、今の宗教家は眞面目に本職を守りて盡し居らるゝや否不明のことも随分ある様に見えます、或は俗人の方に普通僧侶に勝る様の人と往々ある様に見えます、曾て聞く昔の如き學僧は勿論聖僧とも名の付く僧侶は今の世には極めて少きとの事を聞く度に國家の前途は如何にも心細き様であります、國を亡はすものは外敵に非ず寧ろ自國民と考へられます。

信仰の缺けたる人は不便なり

杖を持たない盲人同様

## 第六〇話 教 育

教育の大切なる事は申すまでもなければ共理想通り徹底し居らざるを以て遺憾とする次第であります、當所の昆蟲博物館觀覽の學生丈けにても年々春秋二期の修學旅行として來るもの實に幾萬人に達するや不明なれど觀覽無料なれば實數を示すことは出来ませぬ

其の多數學生の内多くは不謹慎にして随分不都合をするものあり監督者の宜しからざる時は食事でもすると其の後始末には閉口します先づ竹の皮又新聞紙片にて廣き間は不潔極まる或は密柑の皮キャラメルの包紙等連も目を開くことの出来ない様なことも多々あります各學校同様かと云へは監督宜しき學校の生徒は實に其の後始末をする程の不潔は決してありませぬ、不潔の儘で販る様な生徒、団体は少數でも喧騒で後始末の出来たる數百名の多數団体でも實に靜肅なもので直に其の學校の監督如何を想像致して居ります又青年団体に不都合多く或る時某所の青年數十名來り其の團長に對して參考の爲め昆蟲世界の殘本數冊を與へ置きたるに約一時間後団体は去りました然るに折角人夫を雇ひて掃除をなし置きたる場所に新聞の小紙片散布しあれば拾ひ來りて見るに先刻與へたる昆蟲世界大正十一年十月發行にて然も慥に翁の與へたるものなる事の明瞭となりたる事を見て翁も大ひに閉口しました折角與へたる雜誌を小片に引き割き然も公衆の集まる場所に打捨つるとは其の精神のある所に驚きました、青年々々と前途有望と言ふものゝ斯

くの如き青年は何事を仕出すやら誠に寒心の事であります實に自分所有の新聞でも小片に引き割き打捨て公園を不潔にすることは青年等のなすべき事ではありませぬ、況んや先刻貰ひ受けたる雜誌を貰ひたる所の場内に小片に破りて打捨つるとは全く惡意と云ふより外に判斷は出来ませぬ決して無意とは申せませぬ、兎も角現今の教育は物知り人を作るが目的にて立派なる人物（役に立つ人、眞面目の人、平和の忠臣又常識に富みたる人等を云ふ）を養成する事は眼中にない様に考へられます何故なれば小才子は多けれ共大和魂は飛び去りて何んもなく魂の脱殻の様な人物が多くなりたるは誰の罪なるや教育者宜しく考へて見て貰ひたいものであります、故に國を亡ぼすもの敵國にあらずして自國民であると言ひたい様に考へられますは遺憾のことであります。

教育は物知り作るものならで

國家の役に立つ人である

青年は直に國家の柱石

責任重しつとめはけめよ

## 第六一話

密柑の煤病に饅飩の茹汁ユダ

アラビヤゴム

昔し農學校にありし頃屢々翁が郷里に皈れば饅飩の馳走位であります、然るに祖父の栽培し居るところの密柑の各種には蚜蟲並に貝殻蟲の發生し居りて甘露を出す爲め柑橘樹の葉面には甘露に發生する煤病を取る爲め偶然乍ら饅飩の茹汁を散布したるに水分の乾燥したる後は澱粉の煤病に附着して風の爲めに吹き去られて綺麗なる葉面となれり、然るに其の結果を某小雜誌に掲げ置きたるに其の後年のと某大雜誌に某病菌大學者の説として煤病を除去するにはアラビヤゴムを水に解き散布する云々の學説を見て實は驚きましたアラビヤゴムは高價にして然も輸入品である澱粉は廉價にして且つ材料澤山なれば極めて經濟であります、翁の如きものゝ發明は澱粉なるも大先生の發明はアラビヤゴムであります、多分其の大雜誌と云ふは大日本農會報であつたかと思ひますが翁も今

は失念して詳細に調査するの力は遺憾乍らないのであります、識者の御調査を請ふ。

(大正十二年八月二十四日記)

温鈍粉で煤病とるは無學者で

アラビヤゴムは大學者なり

## 第六二話 不幸と幸福

翁は曾てより不幸に遇ざるより不幸なる時なしと云へる格言あるを知り大いに注意し居たるに果して翁の如きは昆蟲に接近するに従ひ大小輕重種々なる不幸に遇ひたるも幸にも不幸に遇ふ度に神佛の御加護に依り却て幸福に導かれたる事を常に喜んだのである

是迄は不幸に不幸重りぬ

今の病氣は幸中の幸

此度の病氣は大の不幸にて

大の不幸を大幸にせん

不幸をば幸福にする人なれば

忠臣ともなり孝子ともなる

右の次第にて翁を惠まんとして多數の神佛は一種特別の神佛學校を新設せられ一校には一教場(病床を云ふ)只一生徒(翁のことを云ふ)を晝夜は素より寸時と雖も精神修養に怠らしめず極めて慈愛深き御心を以て御教授を賜り居るのである。

目に見へぬ神や佛のお恵みで

思ひの外に得る所あり

神佛の御慈愛は是れに止まらず尙便利の爲め幾多の助手を賜り先づ家族のものは悉く助手となり各自分業的に働くを以て何一つ不自由を感ずることなく翁には晝夜を別たす只念佛三昧を課業とするのである。

念佛の力で不幸(地獄)追ひやれば

招かずとも来る幸福(極樂)

尙多數の知己友人は遠近を問はず直接間接に信仰界に導かるゝ様常に慰安を與へられたることは極めて多數である是神佛より與へられたる助手の賜であることを深く信ずるのである然るに最近には東郷元師閣下より「至誠通天」との文字を認め去る三月十二日到着正に拜受したのである又同日大毎社の本社長より南米ブラジル産並セイロン島ガンヂー産の尤も美麗なる昆蟲標本(特に珍奇なる蝶類多く)數箱を賜り其他特に櫻に關する繪畫並全貝石(醫師に懸りて全快の意)と稱へて一種獨特の貝の石に懸りて花立となり是に目下開花中の櫻花數種を挿し枕頭にあるを見れば決して普通の病室にあらずして何となく極樂の世界にある様に考へらるゝのである。

然るに相變らず毎日マッサージの手術を受くる際或る時マッサージに對して翁の全快は決して急速を望むにあらず漸次の恢復を却て望むものなりと云へばマッサージは不思議なる顔をして珍らしきとを云ふ病人であると申し未だ曾てより全快を急がぬ病人は聞

きたとなしと云へり然し翁は全快を好まぬにあらず是迄の如く折角歩行の出来得る際には室外に出で櫻を愛したる爲二回迄病氣は逆轉したので多數の人々に非常な迷惑を懸け恐れ入りたる次第である。故に今回は充分の恢復即ち精神修養を得て始めて神佛學校を卒業させて貰ふの考へであると述べたのである。茲に於て今回の如き大不幸も始めて大幸福に變せしめらるゝ事であると心陰に神佛に祈り居る次第である。

### 第六三話 害蟲驅除と左側通行

或る時某理窟家の質問には翁には永年の間害蟲驅除を奨励されしも今に到るも中々實行出来ざるは遺憾であると頻りに皮肉的に述べられしを以て翁も多少癢にさはりたれば近年非常に奨励されて居る左側通行の如き容易に實行の出来ざるのみならず随分上流社會の理窟家は却て右側通行するものもある様になりました、最下流の澤山の農民が害蟲驅除の出来得る時代は前途遠き様に考へられます、少くとも左側通行の出来たる後のこ

とであると即答したこともありました。

左側通行なさざる内は

害蟲驅除は途手も出来ない

### 第六四話 岐阜市の發展策

昔織田信長公には、岐阜發展策として長野の善光寺を伊奈波に移し小熊に有名なる地藏尊、美江寺に觀音又其の他不動尊等を移轉せしめて繁昌させられたるは如何にも人氣集中策としては實に名法であります、翁も亦一策として御觀音様の御指圖にて日本一の名櫻三十三種を集め來りて觀音櫻と稱して春期は素より秋期開花の櫻樹もあれば大ひに人の足を止め岐阜市繁榮の一策と致して居ります、岐阜市公園の繁昌は従ひて當研究所の繁榮ともなります、當研究所繁昌すれ昆ば蟲思想も普及して自然國家の幸福となると思ひます。

集めたる観音櫻後の世に

岐阜市と共に榮え行くらん

観櫻の爲に集まる人々は

知らず識らずに蟲も見らるゝ

蟲見れば害と益との區別出來

國の爲にとなるぞうれしき

## 第六五話 愚著薔薇の一株昆蟲世界

翁の始めて書を著したるは薔薇の一株昆蟲世界と申す一小著書であります其序文に理學博士箕作佳吉先生には左の如きものを賜りました。

頃日友人名和君其新著一編を余に示さる、題名を薔薇の一株昆蟲の世界と云ふ其の名稱頗る淨瑠璃の外題に酷似す、之を一讀するに及びて、益其淨瑠璃脚本に近きを覺ゆ

蓋し舞臺は薔薇の一株にして、茲に現れ出る者に、主あり、従あり、敵役あり、修羅場ありて、又其仇討あり、之を是戯曲と言はずして復何物にか此の名を下すを得んや古諺に曰く、此世界は一大演劇なりと其語は固より人世を通觀したるに過ぎざれ共、此編を閱すれば、即ち其言の人世外にも亦頗る適切なる實證を徵するに足るなり、讀者若し此書に依りて、吾人の眼前には幾多の活劇が晝夜を別たす、現行せらるゝことを了解せば即ち、自然界に就きて一大事實を學びたるに止まらずして、此世に處するに當り將た大に得る所のものあらんとす、仍つて卷端に辨すと云爾

然るに出版後は某々等の諸氏より随分冷笑を受けました、而しながら世人悉く冷笑者のみにあらず法學博士井上友一先生の如きは現に該書は紙數より評せば慥かに小著なるも内容を通讀したる余の如きは世人の定評に反して外觀こそ小冊子なれその内容は慥に大著なりと斷定し賞讃の辭を惜まざるものであると迄申されました、其後文學博士常盤大定先生から愚著に對して極めて詳細なる評論を送られました故昆蟲世界第二十六卷第



三百二號大正十一年十月十五日發行の雜錄欄に白蟻翁の前に（昆蟲世界三百號滿二十五年記念の祝意を表す）と題して掲載しあれば何卒御一覽に預りたいのであります。

## 第六六話 發病の前徴

大正十二年八月二十七日午前山陽線汽車中發病前に於ける發病の前徴は種々ありました。

- 第一は 播州法華寺に（月日不明）參拜の節白蟻調査中寶塔の附近に於て約三十分間内外は下駄を枕として伏し居りたる事
- 第二は 八月始め友人の來りて談話中視力の極めて衰へて新聞文字の不明でありし事
- 第三は 八月十四日諸生萬靈の追弔會を西別院に執行して飯宅の際には夕食を廢し翌日より俄に食事は半減となりたる事
- 第四は 八月十九日より出發大分縣別府に滯在中大分市より別府に飯る途中電車より澤

山の荷馬車を見るに其馬は何れも頭部長く尾端扁平なる一種異様な形狀に見へたる事は今も不思議であります視力に異變あるの證據であります。

第五は 八月十六日午后山縣伊三郎公と共に山口縣瀧部より下關に參り同日午后六時特急列車に乗車時間約一時間市外散歩したるに不思議にも小女の腰部の偉大なるを感じました横より見れば全くの常人である是又視力に變化あるの證據であります夫より乗車の上永々活動の結果極端疲勞し居れば直に熟眠しました廣島も岡山も知らず朝に到りて眼を覺せば姫路であります姫路發車後展望車にて此所も降雨なき事を眺めつゝある際病氣は舞踏病を突發した多分加古川驛邊かと今より想像を致ます恐らく午前六時過であります願みれば全く一ヶ年前の事とて寧ろ不可思議の事なれば特別記念として一寸記して置きます。

詳細に記せば長くなりますれば極めて簡單にして置きます。

（十二年八月廿七日午前六時半記す）

因に二十七日午前十一時半岐阜驛着自動車にて徐行十二時前飯宅病床に伏したる儘全く一ヶ年を経過しました其病床に於て記しました。

(十二年八月二十七日午前六時半發病の時間に於て記す)

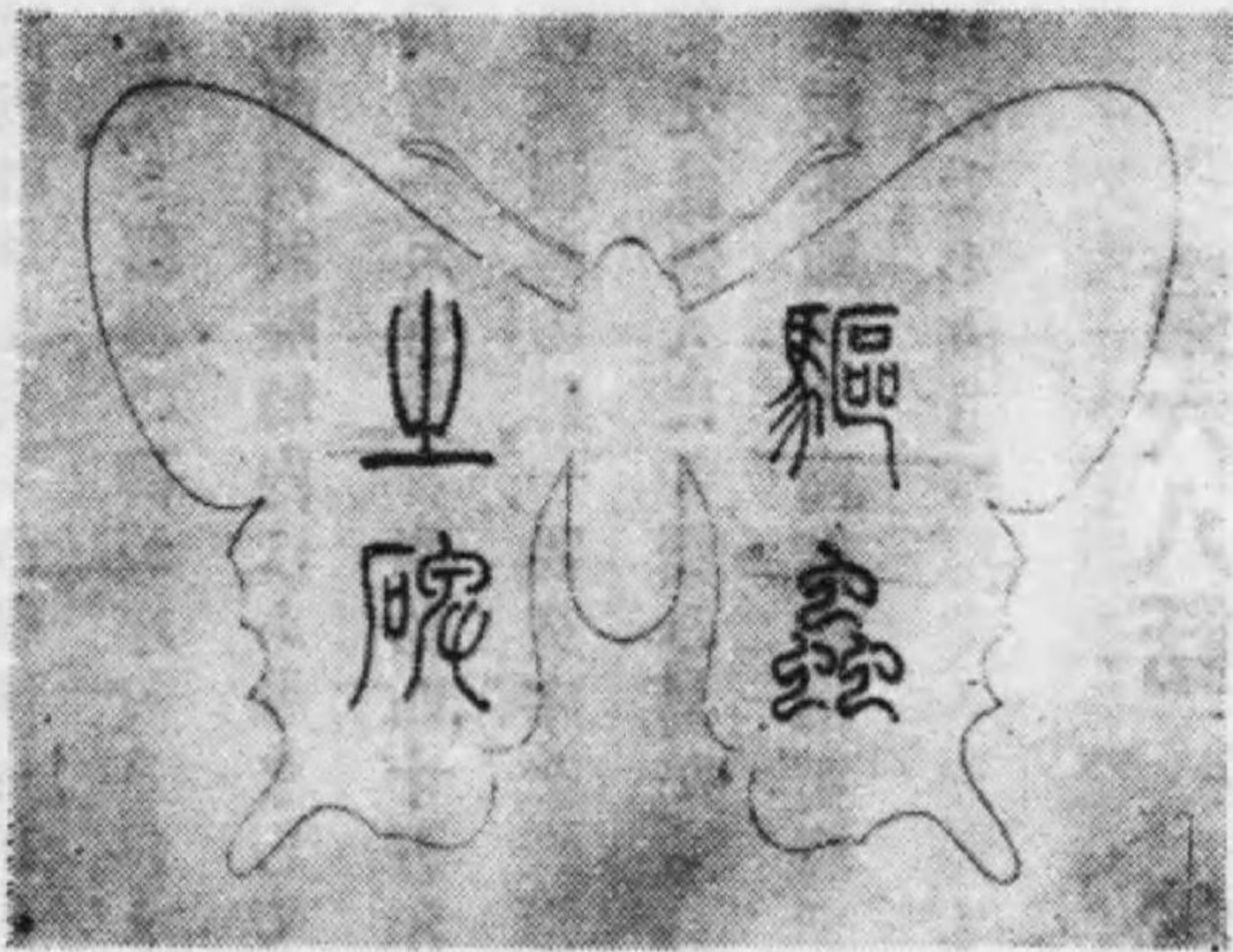
昨年の今月今日今時は

舞踏病にて驚きにけり

### 第六七話 驅蟲の碑

翁が昆蟲研究を始めて以來捕殺したる害蟲の數は實に莫大なものでありまして自然昆蟲に對する愛憐の情が深くなりましたので從來昆蟲の碑を建設し供養を營み大いにその亡靈を慰め様と致しまして明治三十四年五月などは當時本派本願寺新法主大谷尊重親下より「驅蟲之と碑」云ふ御染筆迄頂き乍ら經費其の他の都合上空しく十餘年を経過しました然るに明治四十三年四月本派本願寺の大法主親下が岐阜市西別院へ御巡教の際好機逸

第三十二圖



#### 碑文

夫昆蟲ニ害ト益トアリ國家ノ經濟ニ關スルコト頗ル大ナリ益蟲助クベク害蟲除カザル可ラズ昆蟲ノ研究豈忽ニスベケンヤ名和靖氏奮然斯道ニ從ヒ奏効顯著ナルニ及ビ世人亦漸ク驅蟲ニ努ムルニ至ル想フニ此事殺生ニ屬スト雖モ益蟲ヲ助ケ害蟲ヲ除クハ是固ヨリ大悲ノ行ナリ然バ則チ驅蟲ノ靈タルモノ亦以テ瞑スベシ茲ニ有志相謀リ碑ヲ建テ其靈ヲ弔フ

驅蟲碑並碑文の圖

す可からずとして岐阜縣下本派眞宗同志會、岐阜佛教青年會、岐阜佛教婦人會、大谷派婦人法話會岐阜支部の四個團體が翁に代つて發起者となられ廣く一般の有志者を説いて隣に嚴かなる驅蟲の碑が建設されました翁も希望を達し實に喜ばしい次第であります、碑は岐阜市西別院境内にありまして總高一丈三尺、碑石の高さ約七尺巾約三尺篆額の蝶形横二尺縦一尺五寸、明治四十五年四月二十一日に竣工いたしました、篆額は前記新法主猊下の「驅蟲の碑」四文字を蝶形の中に浮彫りにしました寫眞は即ちそれであり、殊に碑文は何人にも読み易からしめ解し易からしめる爲めに假名交りの至極平易な文として本派本願寺の高僧中山雷響、小池普達、名和淵海、赤松連城の諸師に御願ひして出來たものであります。

## 第六八話 碑 文

翁は元來無學なれども幸ひ廣く旅行したるが到る所に碑文があります其の碑文が長き

漢文であると逆も讀むことも出來得ざれば遂に其の儘となれば何事やら不明の内に其の地を去ることになります、故に翁は驅蟲の碑文を作る際には極めて簡單に極めて短文に假名交り文百五十字以内に願ひましたのは大に意味のあることでありました何分農家の多くに害蟲驅除に徹底する様解り易きが目的でありました然るに或る時愛知縣選出の代議士田中善立師に面會の際該碑文を示したるに面白きことを申されました、自分は南清に永く滞在したる時日本は清國の屬國であると頻りに稱へて然も確實に屬國と思ひ居ります、其の理由は世界各國共大切の事は自國文で書くものなるに日本は日本の文字あり然るに日本人の最も大切なる碑文の如きは必ず漢文で書く如きは其の一證であるとの話を聞き大ひに喜びました翁は田中代議士の如き意味より一層碑文には日本文の必要なることを知りました。

六つかしう云ふのが學者であるなれば

やさしく云ふは無學者である

碑文などやさしく書きて置くがよし

徹底さして効はあるなり

## 第六九話 白蟻翁新年の辭

大正十年は白蟻翁還暦後の第四年にして最早六十五の齡を重ねたり然るに昨年末に於て當研究所の前途を深く思ふの餘り歳暮の述懐に

蟲(無始)己來蟲(無思)蟲(無視)暮す蟲(六四)翁

蟲(夢死)蟲(無私)の間に蟲(無死)になりたや

六十四歳

大正九年十二月 日

名 和 白 蟻 翁

白蟻翁の過去を考ふれば即ち卵の時期を去り漸く孵化して初期の幼蟲となりたる頃より天性蟲(無始)を好みたるも元來無學文旨なれば別に深く思ふ事も無く只蟲(無思)

蟲(無視)と暮す内安政四丁己年十月八日誕生の者も遂に現在の六十四歳となる老期の幼蟲(六四)とはなりたり。然し幸ひ多數同情者の爲め昆蟲研究所は現在の如く存し居るも不徳にして且つ無能の翁なれば發展は素より現状維持に困難にて活動の出來ざること恰も夢中に死するが如し是即ち高等昆蟲(夢死)の蛹期時代に等し、尙不幸なるは祖先より幾分の遺産を貰ひ受け居たるも全く費消し盡して今や清貧實に洗ふが如く如何ともすること能はざるなり、諺に一寸の蟲にも五分の魂と云へる此の蟲(無私)翁に限る誠に憐れなるものなれば寧ろ一日も早く研究所と稱する蟲をして尤も美麗なる然も有益なる成蟲(無死)に羽化せしめ未來永久國家の爲め世界に雄飛せしめられんことを同情者に向つて深く希望す、果して目的を達し得ば翁の肉體は假令何時死するとも最早満足して白蟻觀音六角堂内に永久瞑目するものなり。

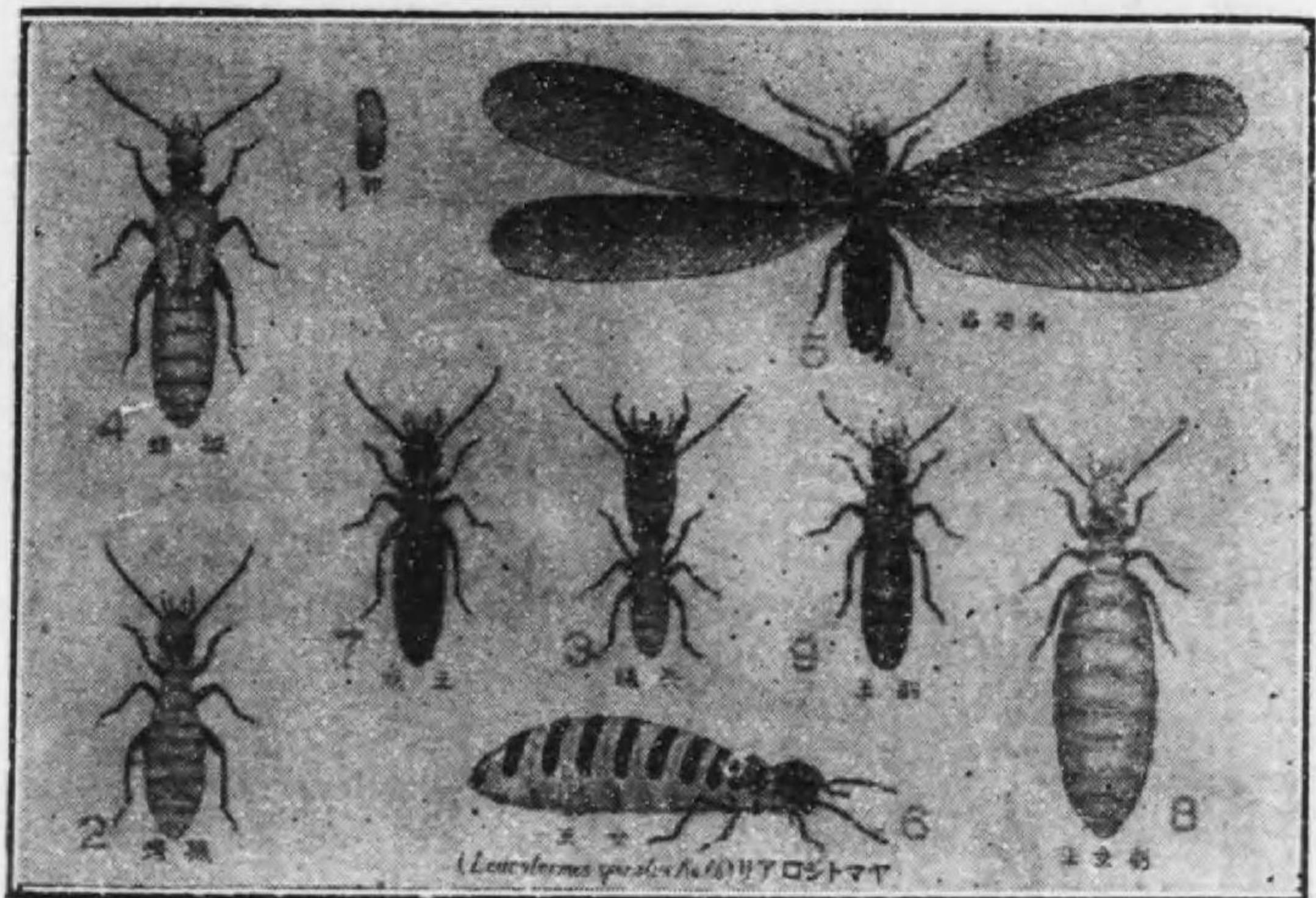
### 第七〇話

### 蟻翁新年の辭 (大正十一年)

大正十一年は白蟻翁の還暦後第五年にして最早六十六歳の齡を重ねたのである、又一方より云へば僅かに五歳の幼兒なれば漸く幼稚園に入りてイロハの稽古を始むる時代となれり、茲に於て愈々白頭の幼兒も白蟻界の幼稚園に入りて先づ白蟻に關するイロハの標語より暗誦するは順序なるを以て其標語を左に掲ぐるのである。

- イ 一番區域の廣き被害は恐らく白蟻
- ロ 爐邊に白蟻の多きは寒國の家屋
- ハ 羽蟻は白蟻の親蟲
- ニ 女王は卵を産むが役目
- ホ 本も衣服も白蟻の食物
- ヘ 平均温度攝氏十五度以上は家白蟻發生適地

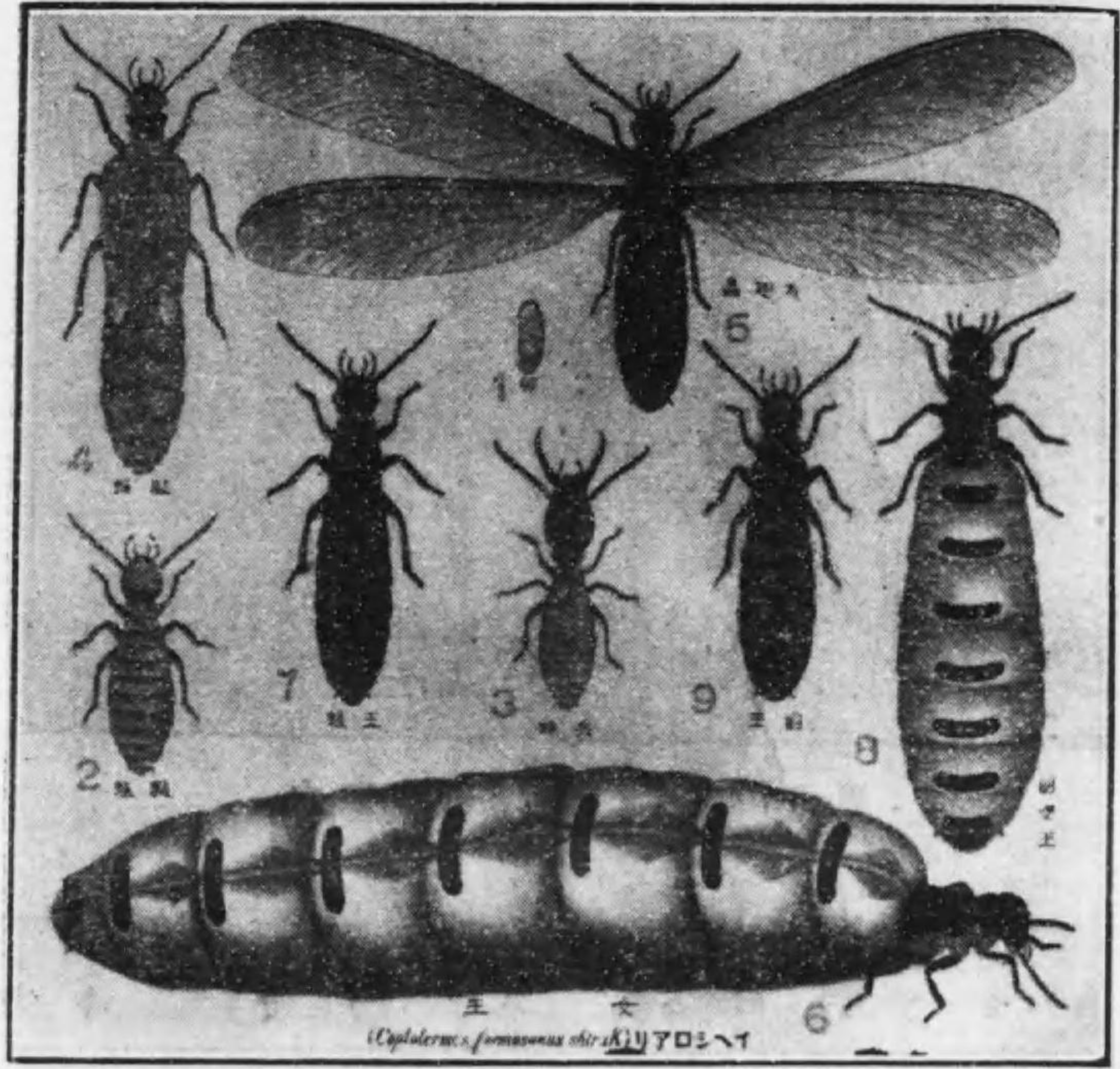
圖 四 十 二 第



圖の「リアロシトマヤ」蟻白和大  
*Leucotermes speratus* Kolb.

- ト 隧道を作り又は飛び出して廣く繁殖す
- チ 塵芥の埋没は白蟻の養成所
- リ 陸地は素より水上の船にも白蟻は發生
- ヌ 塗るにはクレオソリウム第一の防蟻藥
- ル 類似の様でも赤蟻、黒蟻は白蟻と縁遠し
- ヲ 王は常に女王と同様
- ワ 和紙も洋紙も白蟻の食物
- カ 乾燥と光線を恐るゝは白蟻の特性
- ヨ 幼蟲は未來の王、副王、女王、副女

第 二 十 五 圖



家白蟻 (シラキアロシ) の圖  
Coptotermes formosanus Shiraki.

二二八

- タ 王、職蟲、兵蟲
- タ 卵は一所に數百千粒
- レ 歴史は昔しより白蟻の存在を證明す
- ソ 夫程に見へぬも隠れたる蟻害は案外大なり
- ツ 燕は羽蟻を捕食す
- ネ 鼠も羽蟻を好む
- ナ 名和の白蟻翁は毎日白蟻軍と戦争

- ラ ランズや電燈に集まる羽蟻は家白蟻
- ム 蟲の内でも白蟻の分業は特に複雑
- ウ 味くて滋養のある白蟻は少くも鶏の食物
- 井 井戸の附近は白蟻發生地
- ノ 野にも山にも白蟻は棲む
- オ 温所を好むは白蟻の特性
- ク 庫も家も社寺も白蟻は遠慮なく食ひ倒す
- ヤ 大和白蟻の被害は恰も慢性病、家白蟻は急性病
- マ 松材を好むは白蟻の特性
- ケ 汚れたる場所は白蟻の發生地
- フ 副女王は女王、副王は王の後役目
- コ コールタールの塗抹は防蟻の効力僅少

二二九

- エ 椽下の木材には防蟻薬塗抹の必要
- テ 鐵を食ふ蟲とは白蟻のこと
- ア 暗所を好むは白蟻の特性
- サ 櫻も栗も樺も樟も白蟻の食物
- キ 擬蛹は羽蟻の前身時代
- ユ 湯殿や炊事場は白蟻の發生地
- メ 盲蛇も面昆蛙も白蟻を食す
- ミ 水氣を好むは白蟻の特性
- シ 職蟻は働くが役目兵蟲は敵と喧嘩が役目
- エ 椽下の空氣流通は防蟻の良法
- セ 晝間に群飛の羽蟻は大和白蟻
- モ 木綿、絹、毛共に白蟻の食物

セ セメントを穿つは家白蟻

ス 水中に白蟻は溺れ易し

ン 雲霞の様に羽蟻は群飛す

京 京都で大工は上棟式の黙禱に焼け倒れ腐れ羽蟻大明神

右の標語も新年早々諳誦を始めて愈々白蟻退治を徹底する様本年は一層活動するの決心なれば茲に其顛末を記して新年の辭となすのである。

(白蟻雑話第一三五六抜粋)

## 第七一話 安産と難産

婦人界の大厄として是非其子孫繁殖の爲め出産の役目を果す必要があります安産すれば母子共に幸福なる事は云ふ迄もなし是れに反して難産の場合には母子共に或は一方を失ふ事あり、幸ひ出産の出來たるも發育の不充分なる事は常の事であり、故に婦人界に於ては昔より安産の御守を大切にするのであります。

安産の幸福なるはありがたし

難産するは不幸なるらん

御婦人の安産守大切に

さるゝお方は仕合である

安産の守は神と佛けさま

神通力で御加護あそばす

お守を信仰すれば自づから

安産出来る受合ひである

茲に神代に於て諾冊二尊の吾が國土山川を極めて安産されました結果今日の如く吾れ  
 〱は幸福を得たのであります、然るに翁は不幸にして私生兒なる昆蟲研究所を難産し  
 たる結果母子共に産後經過宜しからず産兒は發育不充分愈々衰弱を來し祖先より貰ひ受  
 けたる養育費も皆無となりて最早母子共に瀕死に迫りたる所幸ひ時の關係者の同情にて

私生兒も漸く公認せられ相當の養育費十萬を作りやるとの條件にて産みの母よりも財産  
 一切を拾萬圓として寄附し置きたるも其後養育費として各方面よりの補助を以て其日を  
 送り居るも物價の騰貴するにも拘らず補助の増額よりも寧ろ突然減額さるゝ等の不幸は  
 誠に致命傷を蒙りたると同様であります愈々幼兒は貧血症に落ち入りたる際母親たる翁  
 も不幸大患の爲め是れ又致命傷を受けたるものなれば今更何とも養育する力もなければ  
 只死の來るを俟つのであります折角難産して今日迄養育したるものを見殺しにするは如  
 何にも苦痛なれば何れにして死するものなれば死に際迄活動の上幾分なりとも養育費を  
 慈善家の御同情より恵みの露を蒙り作り置きたいのであります翁は今更ながら安産の御  
 守りを持たぬを思ひて頻りに過去の事は致し方なければせめて今日よりお観音様を信  
 仰して折角産み出したる小供の養育費を作り早く一人前に獨立せしめて國家に對し幾分  
 なりとも盡させたいのが母親の慈悲であります是れ即ち翁の子に對する告白であります  
 子孫に戒めて決して私生兒を産まざる事であります、翁は生涯私生兒即ち研究所の爲



苦みて此世を暮したと思ひます、然し私生兒の爲め幸ひ精神修養の出來得たるは全く幸福でありました。

## 第七二話 白蟻防除と富國

翁も白蟻研究に十餘年も費しましたが是と云ふ特別の研究も出來ませぬけれども幸にして平民的の防蟻法を極めたることを以て大ひに廣く然も經濟的に出來得ることは國家の幸福であります如何となれば我國は世界無比の木造建築物多ければ自然白蟻の被害多くその損害額の容易ならざる事は非常なものであります、將來木造建築物にして白蟻の蝕害を免れたとすれば恐らく山林亂伐も自然免るゝなれば自づから山林保護となります山林の保護は申す迄もなく水源涵養となれば水力電氣は無盡藏となります電力無盡なればあらゆる方面に使用せられて汽車は電力となり稻田の害虫驅除及び最大面積の山林害虫の驅除にも電力應用が出來れば循環的に山林保護水源涵養電力無盡となれば結局富國

となることは明白であります。

白蟻の防除の結果自づから

國の富をば増加出來得る

山林の保護は即ち水多く

水多ければ電力を増す

電力の無盡は各所に應用し

富は殖え行き國は安全

日本は木材建築盛んにて

世界で名高くなりて居るなり

白蟻を防げば家屋助かりて

木材節約出來るものなり

木材節約出來る其の時は

山林保護となるは當然  
山林の保護は水源涵養で

水力電気起るものなり

水電の無盡となれば多方面

汽車は電化となるぞうれしき

其の他に電気の應用多ければ

萬事萬端富は増すなり

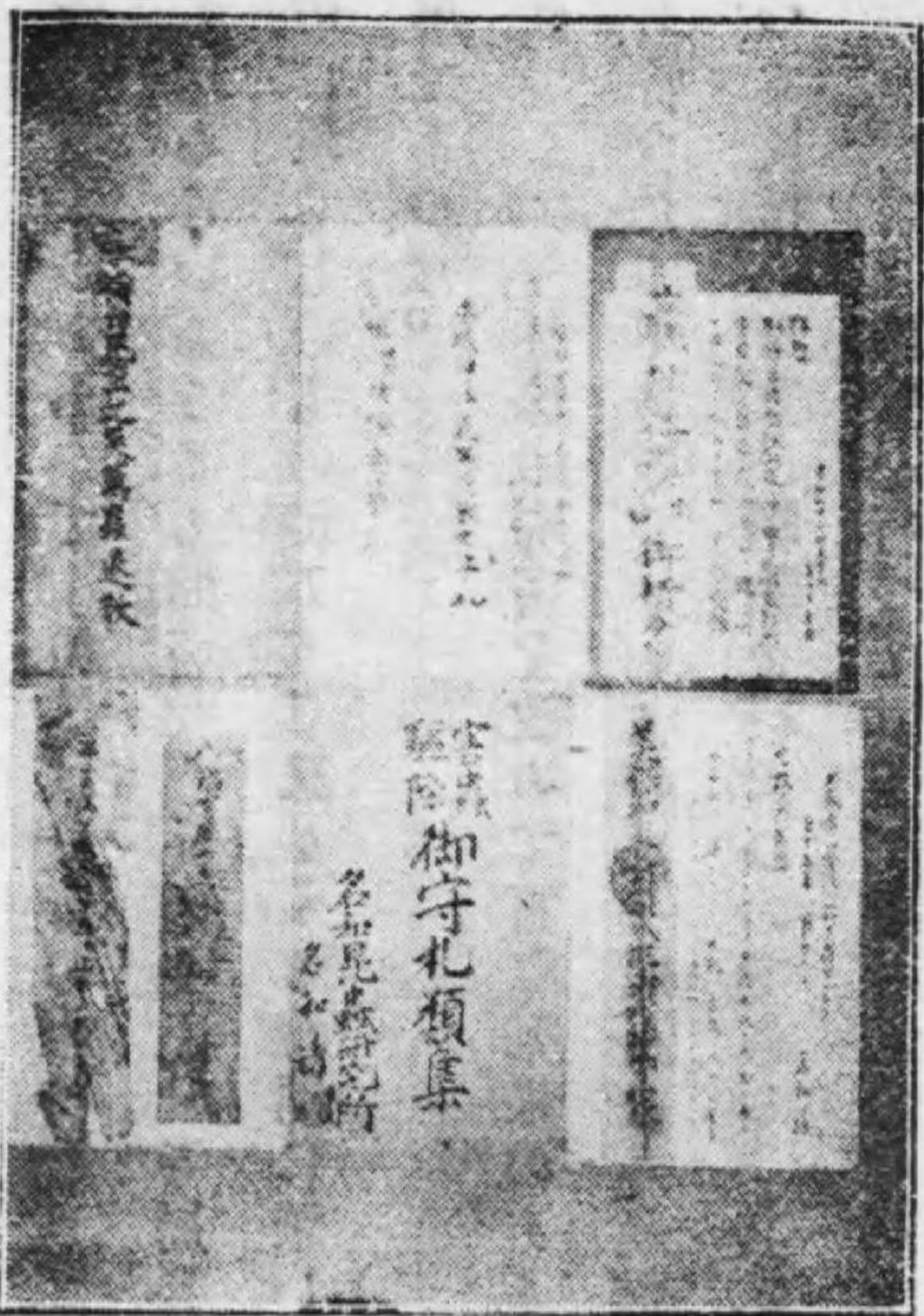
蟻防ぎ富國とならば白蟻翁

最早目的達し得らるゝ

### 第七三話 害蟲驅除と御札

害蟲驅除には御札の盛んに用ひられ居るは驚きました翁は全國より數十百種を集めま

### 第二十六回



防蟲御札の圖

した今茲に僅か二、三を示して  
置きます詳細の事は略します。

(十二年八月二十四日午後記す)

御札にて害蟲驅除はのん氣なり

眞面目にせぬと神罰を受く

人力の驅除の及ばぬ所をば

神佛御加護あらせらるゝ

### 第七四話 御札で蟲の驅除

昔から蟲除の御札を立て、害蟲驅除を行つたのは全國一般の風習であつて明治の中頃  
になつても中々面白い事が残つて居た。

廣島縣の某村では村農會の豫算の中に、害蟲驅除豫算の旅費は出雲大社の御札を受けに行く費に當ててあつたり、鳥取縣の某所には一ヶ所に七種の御札が立つて居た等色々の事を見又は聞かされた。かういふ風だから次第に考が進んで來たといふべきか、御札を買ひ占めて地方に賣りに歩くといふ具合で其費用は大したものである。其莫大な金は皆社寺に上るのであつて、彼等は社寺の維持費と稱して居るが其裏面では大黒様等をかこつて居るといふことも聞いた。元の井上社寺局長も多數の御札を集めて居られたが翁のものに珍らしいものがあり、又かゝる醜聞に驚いて憂へて居られたが其儘死なれて惜しい事であつた。

翁はつく／＼是等の弊害を改めて實際効果のある驅除法を指導せんとしたが又々困難に打ち當つたのである。といふのは一般百姓の迷信は仲々信仰に執着が固く此等の奨勵も却つて反抗心を買ひ驅除を行はぬのである。其處で種々なる策を講じ一般の方法として、先づ兎に角驅除を行つて其上で御札の力を借りる事は自由であると説ひて實行を進

めた所意外にも成績が擧つて來た。こんな事で一時は社寺の神官、僧侶達にも害蟲の講習をして一般の智識を興へ、又御札の費用を驅除費に當つる等の事もやつて來たのだが兎に角世の中は意想外なものである。(大正十二年九月十二日、白蟻翁口授、柳原技手筆記)

## 第七五話 害蟲買上法の弊害

害蟲驅除の法として世間往々買上げを行ふことが多々あります。翁の經驗から言ふこと事實多くの弊害があつて却つて効果の無い場合が多いから次に二三の例を上げて參考に資し度いのであります。

第一例、蠶蛆買上げの失敗。或時翁が三河の國豊橋に行つた際、某が問ふには「蠶の蠶蛆が岐阜では何の用に立ちますかといふのである。翁は不思議に思ひ乍ら某に正して見ると、岐阜の人が來て豊橋當りの蠶蛆を持つて行くといふのでありました。縣に歸つて調べて見ると某郡に於て蠶蛆全滅策として蠶蛆の買ひ上を行つて居る所があつたので

す。莫大な金額を郡農會より出し、一升五拾錢？で應じたのであるが目たゞく間に金が無くなつた。追加した金額も大したものであつたが翌年の蠶蛆の發生は大した變りがない。然るに尙ほ續いて持つて來るから郡農會も續いて買ひ上たが茲に多少の疑問が起りました。發生が多いと言つてもこんなに多い筈はないのにと、能く調べて見ると其は蠶蛆の本場に行つて持つて來たので、大いに閉口したといふ事である。

第二例、天牛買上げの失敗より立身出世、尾張の國犬山町附近の木曾川沿の某村に於て桑樹害蟲桑天牛の驅除を行つた事がある。此時にも某有力者の主唱で買上げを行ふ事にしたが、役場に於ても賛成し一匹一錢で買上げることにした。所が豫算の貳拾圓？は忽ちを買ひ盡したので大いに困つたが途中に於て止めもならず續ひて追加に追加をして其費用に當てたのである。此の有様では一体どの位の費用で足りるかど某有力者は疑問を起し翁のもとに尋ね來たのである。其時實物を持つて來て居らなかつたから翁は自分の標本を出して問ふて見たがどうも桑天牛ばかりじゃないらしい。再び歸つて調査させ

て見ると果して思つた通り星天牛(桑胡麻斑天牛)であつたのである。元來木曾川沿には川柳が多く確かに柳が星天牛に害される事を知つて居た翁は其處に疑問があつたのである。當時此地方では天牛が金になるといふ大評判で木曾川沿には天牛取りで一抔、其れに請負見た様な者が出て子供に取らせて買ひ上げるといふ調子だから金の足らぬのも理のある事であつた。

某有力者は此失敗に氣まりが悪くなつて其後上京し養蠶の研究をされたが今では知名の士になつて活動して居られる。

第三例、稻の螟蟲卵買上げの失敗。翁は明治三十一年九州各地を視察した事があるが此の時にも種々なる事を實見した。各地一般に螟蟲驅除法として螟蟲卵の買上げが流行して居たが福岡の或地方では一塊一厘で買上げて居た所がある。其が其時分大分の金になるので鞍手郡等では車夫が人力引を止めて採卵したといふ程であつた。かくして他人の苗代にまで採りに行く、そして苗代を荒しても一向平氣なので當局も大分困つた様で

ある。後に自家の苗代に限る事を決めたが、一寸わからぬ所から仲々自分の所丈では濟まざなかつた。其中目先の利いた者は仲買の様な事を行ひ、地方に調べに行つて高い所に賣りつけるといふ終末になつて幾ら金があつても足らぬ足らぬであつた。

翁は是等以外にも數多くの弊害のあつた事實に接したのでどうかして弊害を防がんとして抽籤法を取ることにしたのである。例へば天牛十匹に籤一本とか、螟蟲卵十塊に籤一本といふ具合にしてなるべく多くの籤を與へ置き、金額は初めより百圓なら百圓と決定しておいて、後に一等五拾圓、二等貳拾圓等と等級によつて分配するのである。かゝる方法によつて或豫算以上に金を出させぬことにして奨励した所が大いに良結果を得たのである。(大正十二年九月十二日、白蟻翁口授柳原技手筆記)

## 第七六話 局部饑饉と全部饑饉

昔饑饉と云ふことを聞くに其の原因種々あるも兎も角食物欠乏の結果黄金を所持しな

がら餓死したることとてあります幸ひ昔の饑饉は局部なるも全部にあらず然るに今日若し饑饉の來るとせば局部に非ずして全く全部であります此の時は眼前に食物は山積みするも購入せんと欲する金銭欠乏の爲めに餓死を免れずと云ふ危険なることとてあります。

往昔の饑饉は僅か局部にて

黄金を持ちて餓死をなしたり

今の世に饑饉の來れば全部にて

食物山で買ふに金なし

右の次第にては國を亡ぼすものは敵國にあらずして寧ろ自國民であると云ひたい様に考へられます。

## 第七七話 曲線と垂直線

翁の常に信ずる所に依れば自然界を垂直線とすれば人間界は不規則なる曲線だと思ひ

ます、然るに翁の發病後は永き間に澤山なる見舞訪問客のあれば其の内佛の様な方もあれば又鬼の様な方もありて種々雑多であります、其の種々な方々が悉く翁の精神修養の材料となりましたので大ひに喜びて居ります。

日々の御客の種類區別せば

佛(垂直線)もあれば鬼(曲線)も來れり

修養に佛の力ら借るならば

鬼の力も大切である

自然をば垂直線とするならば

鬼の姿は曲線に見ゆ

直線を基礎に勸善懲惡を

判断すれば間違はなし

### 第七八話 昆虫翁の六死

翁の是迄種々なる事情のもとに死期に接近したることは多々ある内に特に最大死期は次に掲ぐる所の六死であると窃かに信じ居るのであります。

第一死 學生時代に友人と共に某所の鐘乳洞調査の際數十尺の深き直孔に墮落の不幸を免れたること

第二死 御嶽登山積雪上の危険

第三死 濃尾震災家屋倒壊の不幸

第四死 蘆原温泉馬車と自動車との衝突の不幸

第五死 鳥眼の車夫の爲め人力車顛倒負傷

第六死 最近の日射病

右の次第にて翁の危険に接したることは實に無数とも云ふべきものであります。幸ひ

今日のあるは全く神佛の御加護であることを信するのであります。

蟲(六死)翁<sup>オキナ</sup>萬死の内をのがれ来る

神と佛の御加護なるらん

以上の次第にて一死の顛末を記すも容易のことにあらざれば何れ追々時間を得て原稿を作り置き餘白のあるのを見て掲載することに致します。

### 第七九話 邦人の奇性と外人の批評

某外人の邦人を評することを聞くに日本人は一種獨特の性を有する不可思議なる人種であると言ひしとを聞きました、其理由は日清、日露、兩戦の際敵軍が屢々不規則なる事即クロバトキン將軍が赤十字社の旗を掲げて退却する等萬國公法に反して戦ふにも拘らず遂に戦勝したる事は有名であります、然るに害蟲軍の年々極めて規則正しく發生するにも拘らず防除の成績宜しからず往々連戦連敗であるは誠に妙であります不規則なる敵

軍と戦ひては連戦連勝で規則正しく發生する所の害蟲軍と戦ひては連戦連敗する事は珍らしき人種であると評します。其言を能く味ひ來れば全く冷評にて規則正しく現はれ來る害蟲防除の出來得ざる事は全く學術の進歩し居らざる事を冷笑したものと翁は常に信じて居ります、是等の言を聞く邦人よ大ひに研究して害蟲軍に對しては連戦連勝の實を擧げられんことを希望する。

### 第八〇話 稻の害蟲を英人に質問

昔しの事なりき外國崇拜の邦人が或る時英國に行きて稻の害蟲に就き種々質問したるに英人の申するには折角の御尋ねなるも是れ斗りは何とも御答は出來ませぬ何となれば不幸にして英國にては稻を栽培致しませぬから稻の害蟲を研究する必要はありませぬ自然稻の害蟲に關する智識生憎持つて居りませぬ、故に日本人は全く瑞穂の國とて稻を廣く栽培さるゝ筈なれば稻の害蟲は矢張日本に於て研究さるゝ方適當であります英國は日本の爲め稻の害蟲迄研究は致しませぬ自國の害蟲は自國にて研究さるゝが至當であると

答へたる由なれば如何に外國崇拜先生も赤面したとの事を聞きたる事がありました誠にも尤もの話であります日本人は外國に親切程外人は日本には親切でない事もある様に考へられます、自分の事は自分がするのは當り前ではありませぬか。(十二年九月五日記)

外國をあまり崇拜する結果

方角違ひ質問をする

## 第八一話 浮塵子と白蟻の一大問題

翁の昆蟲研究は明治十一、二年頃より始まり明治十五年に至りて一段落即ち地方の農學校を卒業して特に幾分づ、順序的に研究する様になりました、夫より明治二十九年迄は中學校師範學校に在職中の翁の昆蟲採集は一種狂人の仕事の様に見られて居りました同年の春退職の上獨立して始めて名和昆蟲研究所なる名稱を發表しましたのであります、然るに翌三十年は恰も浮塵子大發生の年でございまして稲田は一大損害を蒙り實に

其額七千五百萬圓であるとのことであり、翁は時こそ來れりと平素研究したる所を發表し東奔西走大活動を開始しました、縣下の某々の如きは驅除効を奏して一村壹萬圓位の損害を防ぎたる村も出來ましたので今迄の昆蟲狂人が俄かに有用な人間視せられることとなり、結局其年の内には西は滋賀、京都、奈良、大阪、兵庫、岡山、廣島、山口の各府縣並に翌三十一年の春期には山梨、茨城、福島、宮城並に福井縣等へ視察調査に行きて大いに得る所がありました、斯の如く浮塵子の發生の爲め一大損害を受け本邦の農家も始めて眼を覺して害蟲の恐るべきことを自覺しましたので愈昆蟲思想普及を開始し先づ岐阜縣主催の害蟲驅除講習會を始め一方當所主催にて全國害蟲驅除講習會の名稱にて開催し(現に本年にて第三十六回に達したるものであります)其他各府縣、各郡農會、又は教育會等の主催にて種々なる昆蟲に關する講習を開きました恐らく其數は確に記憶せざるも二、三百回に達し其講習終了證書を附與したるものみにしても少くとも二、三萬人を下らざること信じて居ります、其の人々には農業者あり、教育家あり



り、醫師あり、僧侶あり、官吏ありて各職業各階級を網羅して居るのであります、浮塵子發生の爲め昆蟲學界は一大革命を來して大ひに發展しまして、翁の多年研究の結果は此の際多少役に立つたので喜びました、夫より明治四十三年頃までは大した變異もなく経過しましたが同年彼の白蟻被害問題が惹起し曩に起りたる浮塵子大發生の時と同じく當所の活動期に入り以來翁は豫て鐵道院より下附されたる乗車券を活用し東奔西走大いに究むることが出來ました、翻つて當研究所の進歩發展の經路を考へると其數ふ可きものは大小種々ありますが特にこの浮塵子と白蟻と云ふ二大問題に起因するものでありますと同時に翁の一生に特筆すべきものでありまして、翁が白蟻翁と申すのも其邊に起因するのであります、翁も大正十一年八月發病再び起つ能はざる身となりました、今後研究所は如何成り行くでありますか？

## 第八二話 害蟲驅除の方針

茲に掲げたる害蟲驅除の十方針は翁の會て明治三十年浮塵子發生の際、三遠地方に於ける巡回講話をなす時何か聽講者の便利の爲め即席執筆印刷に附して各自に配布して後講演を始めたのである其の當時の方針も目下に於ける方針も大ひに異なる事は見出しませぬ此の分にては今後まだ一該方針を以て進行するも大体に於ては差支なき事と信じて居ります尤も多少の臨機應變の事は勿論であります。

### 害蟲驅除の方針

- 一、害蟲驅除を都合能く行ふには第一昆蟲とは如何なるものなりや、其大体を知ること最も緊要なり。
- 二、害蟲と益蟲との區別を明にし、害蟲を惡むと同時に益蟲を愛護すべし。
- 三、害蟲の習性經過を委しく了知するに隨ひ、愈々都合よく驅除を實行し得らるべし。
- 四、單獨驅除は比較的其効少く、共同驅除は比較的効多し。
- 五、害蟲驅除は一人前ある男子の務めに非ず、宜しく婦人小兒の務とすべし。

- 六、害蟲驅除には簡單有効なる機械と、確實廉價なる藥品とを撰むべし。
  - 七、誘蛾燈用ふべし用ふべからず、注油法行ふべし行ふ可からず。
  - 八、天然驅除を貴び可成的人爲驅除を避くべし。
  - 九、害蟲驅除は抑も末にして、平素豫防に注意するは最も必要の事柄とす。
  - 十、豫防の一効は、驅除の一貫効に優ることゝ心得べし。
- 右の次第にて方針を定め足並を揃へて進行せば如何に強敵たる害蟲軍も恐らく容易に防除し得ることと平素の経験から深く信じて居るのであります。

### 第八三話 百観音と翁の餘命

西國三十三所観音、坂東三十三所観音、尙秩父三十四所観音、是を併せて世に百観音と稱す、翁の六十六は恰も東西兩観音の數に等しく本年よりは秩父參りを始むる譯である。

### 六六は東西観音重りて合す數

秩父參りは今年よりする

右の通り百観音より割り出せば翁の餘命は確かに三十四年もありて大正四十五年を以て百歳に達し得らるゝことゝ信じて居るのですが、果して本年より幾許の歲月を此世に生存活動し得らるゝや大ひに注意すべきである。

### 第八四話 白衣観音假裝行列

観音行列のことは翁の尤も希望する所で然も前途有望のことなれば何とかして繼續せしめんと苦心中熱心なる林醫師の主唱にて愈々観音會を組織して確固たる基礎を造らるゝことゝなれば翁の尤も喜ぶ所であります。今其全文を次に記して参考に供します。

#### 観音會設立の趣意並に規程

抑昨秋並に今春観櫻會の節餘興的の小女白衣観音假裝行列は實に一般観覽者の眼を引

きて人氣殊の外宜しく異口同音の賞讃を博したるは予も其内の一人である其際は恰も白蟻翁の病氣を見舞ひたるにつき翁に對し此行列は是非共岐阜市の繁榮策として年中行事

圖七十二第

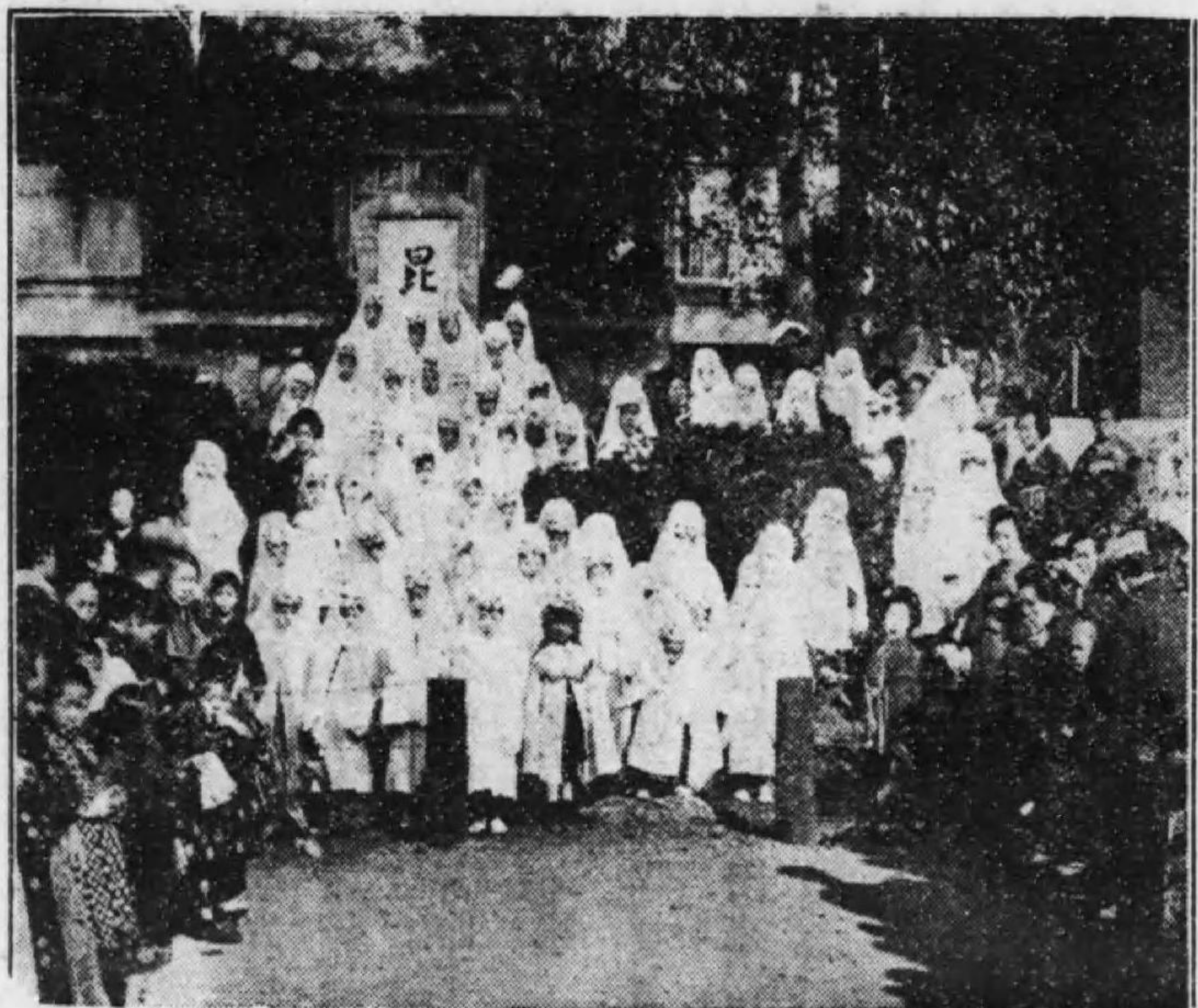


圖の裝假音觀衣白

の一加へ永久に傳へたいと思ふ夫には觀音講の如きものを組織し一口壹圓として一千人出來れば即ち千圓である其利子に依て名櫻會の附屬事業とし毎年施行したい云々と話したるに翁は忽ち賛意を表され即ち本會を觀音會と稱し愈々發表する事になり

りました依て左の規定を設け皆様に續々御申込みを願ふ次第であります其節翁より左の狂歌を得ました。

圖八十二第



圖の合集に近附の碑龜昆り終を列行音觀

願くは千手觀音力らにて、壹千圓を集め置きたし  
花時に觀音行列ありがたし、年中行事如何に尊し  
千圓の利子は六十圓となる、費用是にて差支なし  
御一人が壹圓づゝを納むれば、一千人の同情で足る  
特志家は六觀音(六圓)や御命日(十八圓)、三十三(三十三圓)の化身でもよし  
○規定  
一、會員は過去現在を問はず入會を

歓迎す

- 二、會員には會員證を交附する事
- 三、事務所は便利の爲岐阜市公園内名和靖方に置く
- 四、現金は十六銀行に預け置く事
- 五、現金は壹百圓に達する毎に名櫻會へ寄贈する事
- 六、會員名簿は白蟻觀音六角堂に保存する事
- 七、觀音行列は四月十八日前後の近き日曜日を下し施行する事
- 八、觀音行列の際は勿論毎月御命日には出來得る限り觀音經を讀誦する事  
但有志者の參拜は隨意とす

大正十二年五月十八日

主唱者 林 正 一

## 第八五話 願成寺將來の繁昌

大正十年九月廿六日颱風の爲め觀音堂倒壊し且つ誓願櫻の大樹も折れたる由の新聞を見て同年十月五日翁は態々參拜旁々實地調査の結果何れも白蟻被害のあるを見て、住職に面會の上夫々注意をなし置きたるが其後本尊十一面觀世音菩薩の御恵みにて追々と深き因縁を結ばしめられましたのである。然るに中將姫手植の誓願櫻は櫻の専門家三好博士には大正十二年四月十五日態々實地調査されたる結果恐らく近き將來に内務省より天然記念物として保護樹となることは何となく實現さるゝ様に考へて居るのであります。又本尊の國寶に指定さるゝも或は案外に早く出來得ることと信じて居るのであります。何となれば近き所にある行基作の比沙門天既に國寶に指定され居る以上は其の兄弟分とも思ふべき本尊なれば兎に角國寶調査委員新納忠之介先生の鑑定を早く受くることは實に急務とする所であります果して好果を得ば前途の發展は申すまでもなきことでありま

す、差し當り目下の計劃として名種の櫻樹を撰定して三十三種を栽植して是を觀音櫻と稱すること、是等の實行は是非共同村の青年諸君の力を借りること、尙病床にある翁も

力の及ぶ限り盡すことに致します、果して目的を達し得ば翁の遺骨も喜びて御本尊櫻に接近して永く御加護を受けたいことと思ます、恐らく十年後の願成寺様は繁昌極まることは眼前に見る様であります。

何分御本尊の力の鴻大無邊なることは現に奈良の大佛を造りあそばしたる所の日野金王丸を御指定されました位の妙智力を有せられし程のことなれば今後の發展位のごことは殆んど自由自在に成功さるゝことと深く信ずるのであります。

願成寺十年後の繁昌

御寺へ参詣したる其もとは

風と蟻との手引きなるらん

國寶の櫻保護樹となりぬれば

是れで目的達し得られし

大佛を生み出す力ありと聞く

其の他の事は自由自在に

本尊に觀音櫻捧ぐれば

おのづと人氣集りて來る

青年の力集まる其時は

大願成就寺の繁昌

弘法と行基の力あるなれば

まじめの事は何事も出來

十年の後の御寺の繁昌は

驚く程になるぞうれしき

尊とかる菩薩に近く永久に

吾れの遺骨を守りあそばせ

大正十二年六月十二日

名和 靖 誌

### 第八六話 某軍人令夫人との問答

大正十二年六月十二日、某軍人の令夫人來られ面會したるに極めて修養の出來たる方にて申さるることには一々敬服しました、其際同夫人の申さるゝ内何れに行きても婦人の多くが病氣勝であることを申されました、翁は直ちに當世の婦人は總て虚榮心の爲め自然病氣勝とならるゝ様である例へば門戸を開け放ち置けば自然盜賊の入り安きと同様虚榮心の高き爲常に油斷多く自然病氣に罹るものと考へました。

信仰の高まる時はおのづから

虚榮の心消へ失せて行く

虚榮心なくなる時はおのづから

病氣も失せて無病息災

信仰を望める人は觀音の

妙智の力借るが近道

一心に觀音様を念すれば

妙智の力湧き出づるなり

口先で信仰などと云ふ人は

心の奥は何ものもなし

此の人の行ひ見ればすぐわかる

言行一致出來ぬものなり

言行の一致が出来る人なれば

信仰心の深き證明

大正十二年六月十三日朝六時

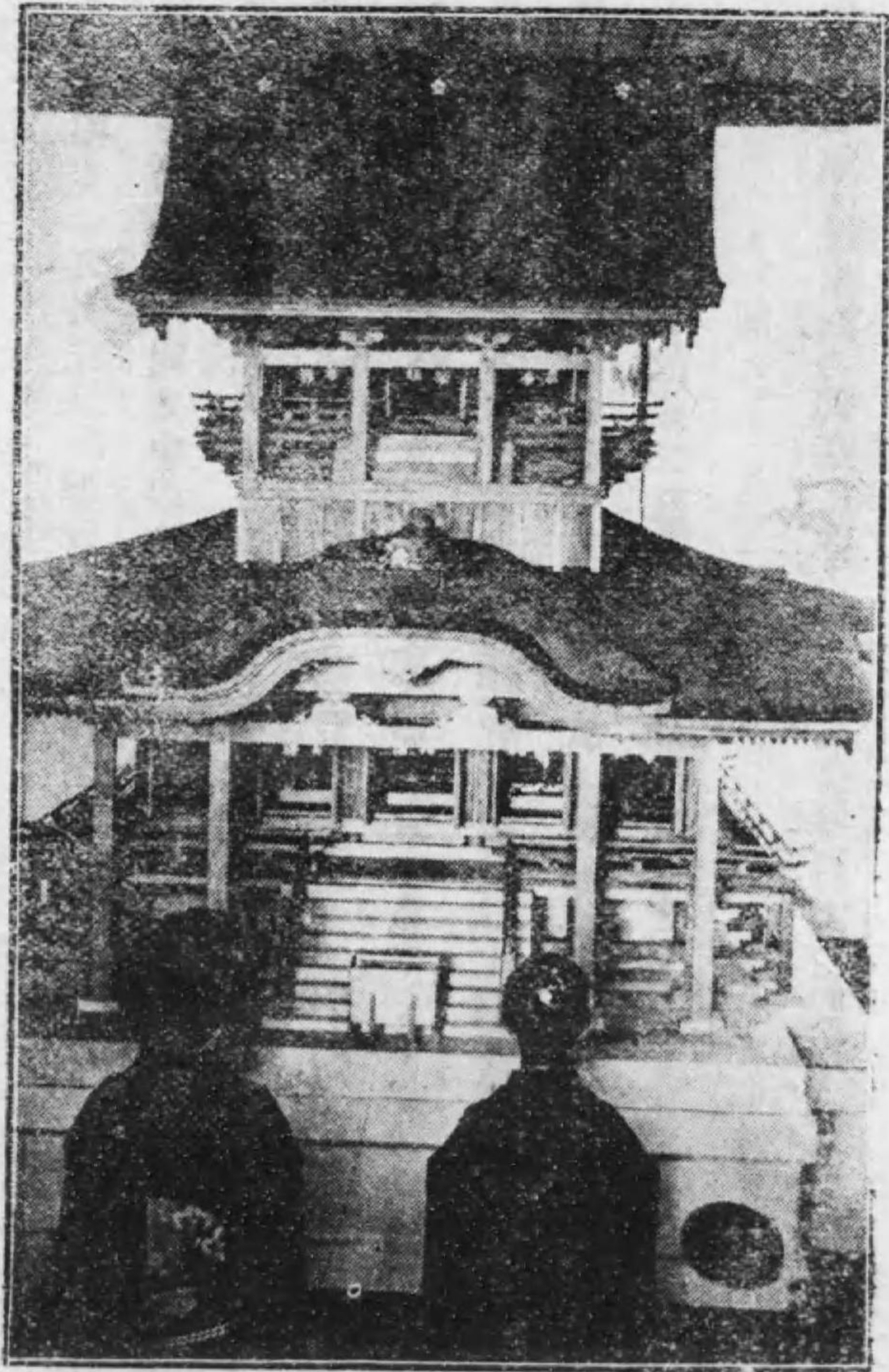
名 和 靖 誌

## 第八七話 櫻の宮

一六二

櫻の宮建設の事は既に昆蟲世界白蟻翁雜話の内に掲載して來ました、翁は曾て還曆記念六事業の内に理想的なる白蟻觀音六角堂を建設しましたが今回特に櫻の宮の建設に際しては種々なる理由にて随分困難をなしたるも全く義侠的なる美術建築大家在名古屋市伊藤平左衛門氏の盡力に依り全く完成したのであります。約束の金額は一千圓なりしも實際に於ては數倍の多額となり、多大なる損害の由なるも、其の邊は名譽ある大家伊藤氏には損害の分は悉皆寄附するとの事、その大膽篤志なること營利を主とせざる所即ち名工たるの確證であります、のみならず昔より云ふ通り勇將の下に弱卒なしとの言の如く建設に従事さるゝ多數の人々も殆んど晝夜兼行にて其の仕事振りに至つては其親切なること恰も神佛の化身かとも思はれます、翁も直接間接に其實況を見聞し喜んで居ります櫻の宮落成の上は如何に精巧にして如何に美麗なるかは想像に餘りあるとであります。

第二十九圖



櫻宮全景の圖

一六三

恐らく天下一品のものなれば近き將來に於ける特別建物の資格を有するもの、如く考へられます。此頃も（九月二日）櫻材特別寄附者たる岐阜縣惠那郡付知町の前代議士牧野彦太郎氏も態々出張實地組立中の有様を見て大に喜びて歸られました。兎も角落成の上は珍奇なる建物として昆蟲標本と共に多數公衆の參拜さるゝことと思ひます。名工伊藤氏の名譽と共に當所の幸福であることと信じます。

尙櫻の宮の御祭神は言ふ迄もなく木花咲耶姬命であります。御祭神の御靈移しを特に静岡縣大宮町に祭られある官幣大社淺間神社へ七月二十三日翁の代理（名和技師）又荆妻の代理（愚孫華子）の兩名を遣し無事に式も済みました。實際林宮司殿の讀まれました祝詞を貰ひ受けました故茲に其全文を掲げて記念と致します。

祝 詞

大日本乃國乃鎮米止東路乃御空仁高久神左備立天留富士乃高嶺乎千代萬代乃幽宮止鎮坐須掛卷母綾仁畏伎綾仁貴伎官幣大社淺間神社止稱奉留木花咲耶姬大神乃珍乃大前仁宮司正六位

ハヤシヂイチツシイヤマヒカシコモホサクモ、サ、ノ、ミ、ノ、ク、ニ、ギ、フ、シ、オ、ホ、イ、ヤ、マ、チ、ナ、ワ、ノ、ヤ、ス、シ、イ、オ、サ、ナ、キ、ヨ、リ、コ、ロ、ザ、シ、カ、タ、ク、サ、ト、リ、  
林治一慎美敬比恐美恐美母白左久百小竹乃美濃國岐阜市大宮町名和靖伊幼興利志固久智慧  
敏久學博久殊仁昆蟲乃科學仁身乎委稱心乎碎伎家財乎銀介天資止爲志明治十五年興利三十有余  
年乃間入紐乃赤伎心乃一筋仁其瀧與乎極米止志天年來吾大神乃高伎尊伎大稜威乎仰伎尊美朝  
奈夕奈齊奉拜奉利都々同市公園仁名和昆蟲研究所乎起志天斯道乃爲米御國乃爲仁盡志介禮婆世  
乃人母聞伎米傳也賀天大朝廷仁聞豆畏久母藍綬章乎賜比後又飾版乃褒賞乎加邊賜比志事等屢  
々奈利伎是波言卷母畏加禮村專良大神乃御恩賴仁依留事畏美奉利辱奉利天伊加傳加波報賽乃業  
仕奉良率止志天曩仁參拜乃砌御大神乃御庭仁往古武田晴信公我手植奉利志止云布櫻乃枯木乃一  
片乎乞比受介辻壽山仁命自畏加禮村大神乃御神像乎刻美豆御守護乃大神止仰奉利齋奉留倍久稻  
葉山乃麓研究所乃側乃見霧加志美波志久朝日夕日乃直刺處山川乃明媚伎處乎撰美定米豆大御  
社乎建設介武止技師等乎參遣志天本宮乃建築乃法乃任仁漏留事無久落留事無久見習比聞習波志  
米今波嚴志久壯美志久法乃任仁御社造利築伎畢奴故此度于息梅吉乎參上畏志米豆大神乃大御分  
靈乎移志奉利天與止乞比出多利是波最母畏久容易加良奴事仁志有禮村母國乃爲米大君乃爲米仁建志



功績登其真心登仁賞傳且其乞比仁任世奴是乎以皇大正十二年七月十三日平吉日乃足日止齋比  
 定米豆珍乃幣帛捧奉利御靈遷乃神業仕奉良久乎神隨愛志止聞食志諾比給比豆和魂奇魂分知給  
 比豆此乃櫻木乃御神像仁御遷坐志豆稻葉山乃春秋乃眺米美波志伎處乃瑞乃御殿乎千代常登盤乃  
 靜宮止鎮坐志隱比坐志豆彼研究所波彌榮仁榮衣彌張仁張利豆稻葉山乃彌高仁名賀良川乃末遠  
 久外國々迄母聞掲介志米給比又遠近乃公民殊仁波名和家乃親族家族衷無久事無久枉拜日乃枉  
 事有良志米須夜乃守日乃守仁護利惠美幸邊給邊止畏美畏美母稱辭竟奉良久止白須

茲に詳細なる顛末を省きたるを以て昆蟲世界誌上に掲載しある白蟻翁雜話の(第二四)櫻の宮の建設(第四七)櫻の宮建設の理由並に(第五一)櫻の宮御祭神の説明以上の三項を御参照ありたし。

### 第八八話 靜座觀音塔と蝴蝶骨

幸ひにして翁の餘命が大正十五年まで延びることとなれば七十歳即ち古稀に達するの

第三十三圖



靜座觀音塔十分一模型圖

であります、果して然らば特別記念として靜座觀音塔を建設する考へであります、位置は岐阜縣本巢郡船木村大字重里小字十五條なる翁の祖先が代々住み來られたる舊邸の西隅の大正四年御大典記念に再建の石造氏神社の南方の地を撰みて東方に向ひて建つるの目的であります、因に同邸は約一千坪あり、日本特種名櫻三十三種を撰み、觀音櫻と稱し己に數百株を栽植して苗木の養成地となり

て居ります、該靜座觀音は勿論永久保存の目的なるを以て一切不變不朽の材料にて經費は一十圓を越へざることとし臺座は九尺靜座觀音六尺總高十五尺にて觀音の體内には翁の書きたる普門品の一字一石を納むる事、尤も十分の一の模型を前以て作る事等であり

ます。

高思を受けし祖先へ酬ひんと

観音塔を建つるうれしさ

永久に残さん爲めの事なれば

一切不變の材を用ひん

臺九尺像は六尺十五尺

建つる所も十五條なり

下部圓く上部六角其間は

大理の石を亂積みにする

祖父の爲愛でし薔薇をば圓く植へ

櫻花と共に咲せてしかな

翁の書く一字一石普門品

静座観音體內に入る

貧翁の力で建つる事なれば

一千圓を越ゆる事なし

祖先なる舊邸内に建つるとは

誠に意義の深き事なり

氏神の南隣りに東向き

静座観音位置は定まる

古稀を期し作りて置けば自づから

翁の心も安くなるらん

観音に御供へものは生ける花

観音櫻絶へず咲くらん

建つる前十分一の模型をば

作り置くのも楽しみである

吾れ死なば醫學の爲めに解剖を

されて御國に盡すうれしき

翁の身は使へるだけは使ひはて

死せば解剖お願ひをする

解剖をされて頭部の蝴蝶骨

静座観音下部に納まる

夢に見し蝴蝶の骨もこの度は

観音座下に永く眠らん

年々に祭りをさるゝ其時は

観音櫻咲き初めし頃

参らるゝ人の投げたる賽錢を

祭りの時に用ひられたし

祭り日にお供へ物を致し置き

なるだけ廣く與へられたし

祭日は讀經ありて其外に

精神修養談しをもする

祭る人櫻花を見つゝ談し聞き

有形無形土産澤山

翁の死去の後には是非共解剖を請ひて頭部内にある蝴蝶骨を貫き取りて観音塔内に永久保存さるゝに付翁も一度實物の蝴蝶骨を見たとて種々苦心せしところ幸ひ大阪の別所彰善君の心配にて金澤醫大の金子博士より實物を拜見するの光榮を得ました、一方秋山蓮三氏の心配にて京都の上野製作所にて模型の蝴蝶骨を求めた毎日親しく見て居るのであります。

翁も亦無情の風の吹き來れば

蝴蝶の骨となるぞうれしき

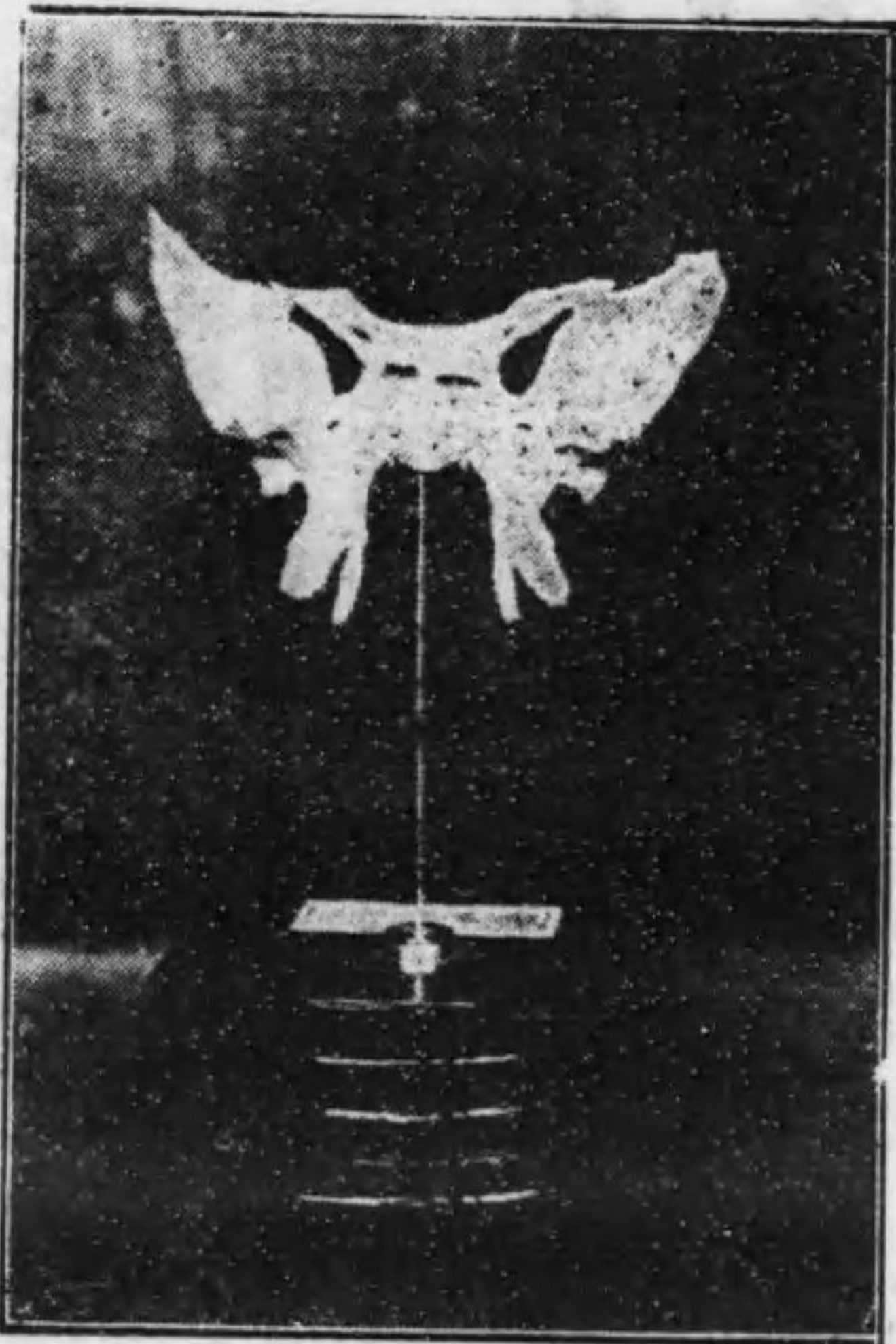
## 第八九話 自然禁酒

一七二

翁は小供の時より喫煙も飲酒も嫌ひにて遂に喫煙は絶對的出來ませぬのでありました

飲酒は境遇の爲め萬止むを得ず  
負けず嫌ひの爲め用ひたること  
はあるも決して酒好きと云ふ様  
な事はないのであります、故に  
大正三年三月始めて酒を神佛に  
捧げる事と致しまして今年で丁  
度十年間は全く一滴も用ひたる  
ことは断じてありません翁の禁  
其の結果として何かに大々的に

第三十三圖



蝴蝶骨模型圖

酒は人爲的に非ずして自然的に禁酒したのであります、

利益を得たので喜びて居ります、今一々茲に記せば一大書籍の出來得る位であります、  
兎も角翁の今日あるは全く禁酒の結果神佛の御加護に依りて陰に陽に幸福又幸福を得た  
ので只々神佛に對して感謝して居るのであります。

人間と約束禁酒駄目なれば

神と佛に約束をする

永年は地獄の様で暮せしが

今の病氣は極樂である

酒止めて丁度十年となりけり

飲みし昔は地獄にぞある

酒飲みし昔思へば地獄なり

飲まぬ今日極樂である